【第一場】

時は１８７２年、明治５年。一人の男が寝転んでいる。
鈴木万太郎である。武骨そうな若者で酔ってる様子。
万太郎が寝ているとも知らず、そこに燐家から萱野乙女が庭から入ってくる。

萱野乙女　万さま、おめでとうございます。
あらあら、またお酒を食べて、お休みになってはるわ。
ほんまにいつまでも童子のようなお人やな…万さま、これいなぁ、万さま。
隣に住んでる萱野でおます。起きはらんと風邪ひきまっせ。これ、万さま、
万太郎さま。困った人やなぁ、せっかく黒豆を持って来たげたのに…

そう言いつつ、自分で黒豆を食べはじめる。
万太郎は眠ったまま、高いびきをかいている。

萱野乙女　あかんわ、こら。
どれ、ほんなら失礼して、土間のとこへでも置いておこかいな。

萱野乙女が勝手に上がって、奥へ入っていく。万太郎は寝たまま。萱野は用事を
済ませると、万太郎の傍にあったおちょこを片付けて、また庭先から戻っていく。

萱野乙女　ほんなら、失礼しまっせ。やれやれ、男臭い家やなぁ…開けていこか。

萱野は戻っていってしまう。ややあって、玄関先で声がする。弟の千次郎である。

千次郎　え～、おこんにちは。いませんか？おかしいな…
え～、おめでとうございます。明けまして…
万太郎　（くしゃみをして起きる万太郎）ふぁ？
千次郎　兄さん、おるのか？明けましておめでとうございます。俺や、千次郎です。
万太郎　おお、千次郎か。すまん、すまん。今開ける。（玄関を開けに行く）
よおー、おめでとうさん。なんや、いつから呼んどったんや？
（２人入ってくる）
千次郎　さっきからずっとや。かなんなぁ、寝てたんですか？
万太郎　おお、朝早よぉに生田さんに初詣に行ってな。帰ってちょっと
飲んだら寝てたみたいや。お前…さっきも来たんか？
千次郎　いいえ。
万太郎　そうか、なんや誰かと喋ってたような気がしたが…。

千次郎　まぁええか夢見とったんやろう。ところで今何時や？
万太郎　そろそろ、（懐中時計を見る）正午です。
千次郎　わちゃー、えらいことや。父上と母上になにもしとらんで。
　　そんなことやないかと思ってました。仏壇に供えるもんはここに
　　持ってきましたから、兄さん、お酒を出してください。
万太郎　さすが我が弟やな。用意がええわ。よっしゃ、酒やな。これでええやろう。
　　（さっきまで呑んでた徳利を下げる）

２人は用意ができたところで仏壇に向かって手を合わせる。

万太郎　父上、母上。明けましておめでとうございます。万太郎でございます。
　　遅くなりましたが、お正月のご挨拶をさせていただきます。
　　ここに千次郎が持ってきてくれたもんがありますので、祝ってください。
千次郎　私が持ってきたことなんか言わんでもええんです。
万太郎　そうかて、お前が持ってきたんやないか。
万太郎　兄さんは長男やねんから、そんな細かいことは報告せんでもいいんですよ。
千次郎　いちいちうるさいやっちゃな。それより、さっきから気になって
　　たんやけど、なんやねんその頭のもんは！仏壇に手合わせるのに
　　行儀が悪いで。取れ。
千次郎　いや、これは…
万太郎　なんや？
千次郎　これは…ちょっと…恥ずかしいんです。
万太郎　男やろ、なにが恥ずかしいねん。第一、兄貴に見せられんほど
　　恥ずかしいっちゅーのはどういうことなんや？
千次郎　いや、そんな。なにも兄さんに反抗してるとか、そんなつもりはないですよ。
　　ただ…これは…
万太郎　なんや？…あ！ああー！分かったぞ。

いきなり千次郎の手拭をとる。髪が短くなっている。

千次郎　兄さん、あきませんよ。
万太郎　やっぱりや。やりおったなぁ。いつか、いつかと待っとたんや。
　　よかった、よかった。これでやっとお前も明治の男や。
　　どうやさっぱりしたやろう？ザンギリ頭を叩いてみれば、
　　文明開化の音がする、ちゅうからな。あはははは。
千次郎　兄さんは新しいもんに抵抗が無さ過ぎるから困るんや。

父上はご維新で亡くなったんですよ。
万太郎　それは5年も前のことやないか。ええかげんに我々も時代に
ついていかんとあかんやろ。お前なんか新政府の役人の端くれやないか。
千次郎　端くれは余計です、端くれは。
万太郎　まぁまぁ、それより、正月によう髷を落としてくれる髪結いがあったな。
千次郎　いや、髪結いやないところで落としました。
万太郎　どこでしたんや？
千次郎　写真館です。
万太郎　洒落たこと言うやないか。写真館やと？ほうー。
千次郎　いや、写真館の親父が髷を落とした写真を撮るなら、
ついでにうちでやってあげますと言うてたんで…
万太郎　なに、そしたらお前、もう写真におさまってきたんかい？
知らんぞあれは魂を抜かれるちゅうからな。
千次郎　迷信ですよ。兄さん、男子たる者がそんなものを恐がっててどうするんです。
万太郎　あほか、現に知り合いの長州藩士が写真を撮った3日後に
死んだことがあるんや。俺はいややな。
千次郎　そんなこと言うてはるから、２８になっても嫁がこんのですよ。
万太郎　兄さんが嫁を取らなかったら、私にまで来ません。早くしてください。
千次郎　なんや、お前、結婚したいんか？
万太郎　１人はなにかと不便ですからね。
千次郎　国から給金をもらっとる奴は言うことがしっかりしとんな。
万太郎　兄さんがぼーっとしとるんやないですか。うかうかしてて３０になってから
では遅いでしょう、人生の半分過ぎまでやもめを通すおつもりですか？
千次郎　はっきり言うなぁ。そんなつもりやないけど、明治に変わってバタバタした
世の中や。誰が貧乏士族のやもめのとこに嫁に来るかいな。
万太郎　仕事もせんとブラブラしてる男のところに来るぐらいやったら
羽振りのいい商売人のところにいった方がましやろう。
千次郎　それは、ご自分のせいやないですか。ブラブラせんと私と一緒に
伯父上に頼んで職を貰えばよかったんですよ。
万太郎　俺はあの人は好かん。
千次郎　たった一人の親戚ですよ。
万太郎　分かってる、分かってるけど頼らんでもなんとかなるやろう。
まぁお前が伯父上に職を貰ったことには反対せえへんが、
俺はこれでええんや。
千次郎　そんなこと言うてるから嫁が来んというのです。
万太郎　やかましいな、正月早々に、分かった。貰ったらええんやろ？

【第二場】

１８７３年、翌明治６年。襖を開けて、１人の女が登場。ここで１年が経つ。

育子　明けましておめでとうございます。
千次郎　あ、義姉さん。明けましておめでとうございます。
育子　千次郎さん、先ほどは結構なものをいただきました。
　ありがとうございます。
千次郎　いや、つまらないもんです。あとでみんなで食べましょう。
育子　はい。
千次郎　えらいもんですね、兄さん。義姉さんが来て初めての正月やけど、
　女の人が家に入ってくれるとこうも清潔になるかと感心しますわ。
　今年は仏壇にもちゃんと正月のお供えがしてあるし、
　私もやっと肩の荷が降りましたよ。
万太郎　お前が去年から嫁を貰え、貰えというから貰ったんやないか。
千次郎　そんな、私のせいですか？
万太郎　まぁ、そんなところや。俺はややこしいことが嫌いなんや。
　これで世間体も立つんやったら、ええやないか。
千次郎　そんなことばっかり言うて、近所ではおしどり夫婦で通ってるそうですよ。
万太郎　誰がそんなことを言うてるんや。ほっといてくれ。なぁ、君。
育子　はい。
千次郎　君？兄さんは義姉さんのことを君と言うてるんですか？
万太郎　そうや。うちはもともと西洋式に賛成の家系やで、英語では
　相手のことはみんな「ＹＯＵ」や。つまり、君でええやないんか？
千次郎　やれやれ、義姉さんが来てから前より我が侭な人間になったようですね。
　義姉さん、兄さんが無茶をしようとしたら、うちへ言い付けに
　来てくださいよ。いつでも意見しに来ますから。
育子　はい、ありがとうございます。でも、大丈夫です。
千次郎　はぁ。
万太郎　ははは、ほらみてみぃ。育子の方が肝が座っとるやないか。
育子　…あなた
万太郎　うん、なんや？
育子　おせち料理を作ったんで、千次郎さんと食べてみてください。
万太郎　ええー？（嫌そうにする）
千次郎　さすがに女の人がおると違うなぁ。おせち料理ですか。いただきますとも。
育子　じゃ、用意をしてまいります。（退場）
万太郎　あほか、千次郎。なんで食うなんて言うんや。

千次郎　は？
万太郎　育子の作ったもんは、だいたい食われへんねんぞ。
千次郎　なんで？
万太郎　…まずいんや。
千次郎　そんな、あほな。義姉さん、見るからに料理も上手そうやないですか。
万太郎　それがちがうんや。大体、俺のところに嫁に来てんぞ。
　　なんかキズがあるはずやと思わんか？
千次郎　そんなはっきり言うてどないするんです。
万太郎　こっちは貧乏士族の職なしの３０男やで、しゃーないやないか。
千次郎　そやけど、義姉さんは結婚する時の話では家柄も公家の血が入ってる、
　　教養も申し分ない人やて…
万太郎　そこが問題やったんや。
　　育子はお父上に男の子と同じように育てられたらしいんやが、
　　要するにお母上が早くに亡くなって女の子らしい教育はされへんまま
　　育ったんやな。つまり、女らしいことが苦手なんや。
千次郎　そんなあほな。女が女らしいないってどういうことです？
育子　お待たせしました。（おせちを持って入ってくる。）
万太郎　しーぃ、今に分かる。ともかく食えよ。

なんにも知らない育子は万太郎と千次郎にお箸を渡し、お重をすすめる。

千次郎　わぁ、きれいやな。美味そうやないですか。
万太郎　おや？（まんざらでもないという意外そうな顔）
育子　見よう見真似なんで、味が心配ですけど…
千次郎　いや、初めてにしてはよく出来てはりますよ。ねぇ兄さん。
万太郎　お…おう。
千次郎　この、高野豆腐もおいしそうやな。私、好物なんですよ。
育子　そうですか、じゃ、これを先にお取りしましょうか。あなたも？
万太郎　ん？…そうやな、それをもらおうかな。
育子　（２人に高野豆腐をとる）どうぞ、召し上がってみて下さいませ。
千次郎　いただきます。

千次郎は兄の言葉を信用せずに思い切り口に入れる。

万太郎　おぅ、いただくとするか。（万太郎も目をつむってたべる）
千次郎　う。

万太郎　お。
２人　う…う～ん。
育子　どうですか？
千次郎　んんんん、ん、ん。うまい！
育子　まぁ、良かった。

兄弟は本当は吐き出しそうになっているが、我慢して酒で胃に流し込む。

千次郎　兄さん。（目で訴える）
万太郎　ほら、言うたやろ？俺は嘘はつかん男やで。
千次郎　そんなこと今更言うたって…
育子　なんですか？
万太郎　いや、あの…それ、君の料理が本当に美味いんかとこいつがぬかすからな。う、唸るほど美味いと言うてたとこやったんや。
千次郎　あー、人を悪者にして、ひどいやないですか、兄さん。
育子　まぁ、嬉しい。私、そんなに誉めていただけるなんて思いもしませんでしたから。どうぞ、それでしたらお２人とも、もっと召し上がれ。
２人　ええ？
育子　さぁ、どうぞ。
２人　あ…はい。

２人、また口に高野豆腐を入れてうなっている。育子はそれをにこやかに見ている。

千次郎　あかん、ちょっと失礼。（奥へ駆け込んでいく）
育子　まぁ、どうなさったんでしょう？

そこに隣の萱野乙女が庭先から訪れる。

萱野　おめでとうございます。
育子　まぁ、萱野のおばあちゃま。明けましておめでとうございます。
萱野　ああ、奥様。おめでとうございます。万さまも、おめでとうございます。
万太郎　ああ、おばあちゃん。おめでとうございます。
萱野　これ、黒豆でんねんわ、ちょっとお裾分け思いまして。
育子　まぁまぁ、ご丁寧にありがとうございます。
萱野　いえいえ、毎年作りすぎて、娘に怒られてますねん。貰うてもろたら助かりますわ。

万太郎　ああ、おばあちゃんの黒豆！これ美味しいですねぇ。
ほんまうちの家内も習いに行かさんとあきませんわ。
うちのんは料理あきませんねん。
萱野　いや、そんな誉めてもろうたらバチ当たるわぁ。
万太郎　いや、ほんまに旨いですよ。
萱野　おおきに、ほんなら食べておくれやす。
万太郎　あ、どうも、ありがとうございました。

萱野は去る。残った万太郎と育子。なんとなく目が合う。

育子　あなた…
万太郎　うん？
育子　私の料理はまずいでしょうか？
万太郎　え…あはは…あほな、あれは君、ほら…近所付き合いやがな。
相手は年寄や、ああ言うたら喜びはるがな。
育子　本当に？
万太郎　あ、当たり前やがな。
育子　ああ、良かった。
万太郎　あほやなぁ、あはははは…
育子　（笑い顔になる）
万太郎　さあさ、続きをいただこうか。
育子　はい、たくさん召し上がって下さいね。
万太郎　え、ああ…うん。そうやなぁ（諦めたように）よし、食うぞ！

と、言いつつ萱野が持ってきた黒豆を食べ始める。

【第三場】

それから１２年。１８８５年、明治１８年。２人の間には女の子ばかり３人の子供が生まれている。上から雪子１０歳、月子８歳、花子５歳。

子供たちが襖を開けて入ってくる。

育子　さあさ、早くしなさい。お父さまにお正月のご挨拶をしてください。
雪子　お父さま、明けましておめでとうございます。
月子　明けましておめでとうございます。
花子　明けましておめでとうございます。
万太郎　うん、うん。３人とも綺麗に飾ってもらったな。
　お母さまに作ってもらったんやな。
３人　はい、お父さま。
万太郎　雪子と月子はあとでお父さまと生田神社へ初詣に出掛けようか。
花子　花子はお父さま？
万太郎　花子は来年からや、６歳になったら連れてってやる。
花子　本当に？
万太郎　ははは、嘘は言わん。私は嘘は嫌いや。雪子も月子も５歳までは
　お留守番やったんや、そうやな？
雪子　はい、お父さま。
月子　お父さま、伯父さまがまだいらっしゃらないんですけれど、
　今年もご一緒するの？
万太郎　ああ、千次郎は多分、飯を食うてから来よるんやろ。
育子　そうですね、千次郎さんはいつもうちで食べるのを遠慮しはるから。
雪子　どうして？
育子　あなた達がおるから、お母さまに世話をかけないようにして
　下さってるんでしょう。子供だけでも大変やのに私の食べるものなんか
　お構いくださいませんようにって、それはそれはお優しい方やから。
万太郎　うまいこと言うな千次郎は…
育子　え？
万太郎　いや、なんでもない。さて、では我が家もおせちをいただくか。
育子　はいはい、雪子さん、お手伝いして。
雪子　はい、お母さま。

雪子がお膳を出してる間に月子が父に近付く。

月子　お父さま、お年賀状が来てましたよ。

万太郎　お、そうか。ああ、学校の先生からやな。お母さまのもあるな。
月子　お母さまのも？
万太郎　うん、お母さまの出た女学校の校長先生からや。
月子　ふうん…

おせちの用意がされ、一家は食べ始める。

育子　さあさ、お待たせしました。
万太郎　揃ったか、ほな、いただこうか。
３人　はい。お父さま。

花子が真っ先に食べようとする。

育子　これ、お父さまから。
花子　はあい。
育子　あなた、なにをお取りしましょ？
月子　高野豆腐。
万太郎　月子、なんちゅうことを言うんや。
月子　高野豆腐よね？お父さま。いつも大好きって言うてはるもん。
万太郎　ははは…は。
育子　まぁ、月子さんったら。偉いのね、お父さまの好きなもの覚えてるの？
月子　はい。月子もお母さまの高野豆腐を作れるようになって、お父さまに作ってさしあげるの。
万太郎　そんなことせんでええぞ。ええからな。２代に渡ってまで…
育子　あら、あなた。泣いてらっしゃるの？
万太郎　あほな、そんなわけないやろ。
育子　まぁまぁ、月子さんの親孝行なこと。ほほほほ。

子供たちが父を覗きこんでいる。

万太郎　さぁ、ほないただこか？
３人娘　いただきます！（モリモリと食べる３人）
万太郎　お前らはうちの味で育ってるんやなぁ…
育子　当たり前じゃないですか。
万太郎　ほんま、慣れっちゅうのは怖いなぁ…

【第四場】

１８９５年、明治２８年。万太郎５１歳、育子４１歳、
雪子２０歳、月子１８歳、花子１５歳、千次郎３７歳。

千次郎　こんにちは。明けましておめでとうございます。
花子　あ、伯父さまがいらっしゃったわ。
万太郎　よう、声だけで分かるな。
花子　私は耳がいいのよ。（玄関に行く）
育子　花子さんは今の子やわねぇ、お転婆さんやわ。
万太郎　今の子は女の子でもあれぐらいはっきりしてた方がええんやろ。
千次郎　兄さん、義姉さん。明けましておめでとうございます。
万太郎　ああ、おめでとうさん。
育子　明けましておめでとうございます。
３人　明けましておめでとうございます。
千次郎　兄さん、表で萱野のおばあちゃんに黒豆を預かってきましたよ。
花子　わーい、黒豆や。
育子　これ、花子さん。
万太郎　まぁええやないか。どうでもええけど、千次郎、その人は
萱野のおばあちゃんやないで、娘さんの方や。
花子　おばあちゃんは最近、寝込んではるから黒豆なんか煮て持って来はれへんわ。
千次郎　ああ、どうりで。えらい若う見えたはずや。
しかし、それにしても似てますねぇ。
育子　ほほほ。そうですね。この子らもおばあちゃんと、奥さんの見分けが
つかへんって、よう言います。
花子　つくわよ、おばあちゃんの方が白髪が多いもん。
千次郎　ははは…ここは女の子ばっかりやから華やかやなぁ。正月っちゅう感じが
するわ。１人でおったら暮れも正月も関係ありませんからね。
花子　淋しいの？それやったらここに住めばいいのに。
もうすぐ雪子お姉さまの部屋が空くから、来はったらいいんだわ。
育子　これ、花子さん。
花子　は～い。
月子　花ちゃん、伯父さまに対してぞんざいな口をきき過ぎやわ。
もう少し大人しくしなさい。
花子　月子お姉さまはそう思えへんの？
月子　思ってても女の子はすぐに口にだせへんの。
花子　なんで？

月子　さあ、そんな詳しいことは知らんわ。
千次郎　ははは、ほんまに女の子ばっかり産んどいて良かったですね、兄さん。男の子やったら去年の清国との戦争に取られてるところや。
万太郎　ええんかいな、お前。政府の役人がそんなこと言うてて。
千次郎　私かって、身内が死ぬのは嫌ですよ。父上がご維新で亡くなった時を思い出しますからね。
万太郎　ああ、お前は１０代やったからなぁ。
千次郎　そんなことより、雪子に今日はお祝いを持ってきたんです。こんなことは、おめでたいづくしがええと思って。
雪子　いややわ。伯父さま、式は月末ですのに。
万太郎　ええがな、雪子。めでたいづくしで。
雪子　そや、これから鈴木家の結婚は正月に全部すると決めとこか。
万太郎　だって、私は…
心配するな。なにも来年に式を延ばせと言うてるんやない。お前はこの月末やねんから、今日みんなで祝うということでええやろう。そやけど、月子からは式もそうしょう。なぁ君どう思う？
育子　あなたがここの家長なんですから、私は決めていただいたらそう致しますわ。
万太郎　月子はどうや？
月子　お父さまが言いはるんやったら私も。
万太郎　花子は？
花子　私、結婚せーへん。
万太郎　なんやと？
花子　だって、男の人に一生仕えるなんて無理やもん。
育子　花子さん、なんてこと言うの。
万太郎　ははは、ほんまに今の子やなぁ、お前は。ほんなら何になるんや？
花子　樋口一葉みたいな女流作家。
万太郎　なにを？
花子　お父さま、知らないの？「たけくらべ」私なんて買っていただいてから１００回は読んだわ。森鴎外先生も幸田露伴先生も絶賛してらっしゃる。これからは女文士の夜明けが来るのよ。
育子　花子さん…
万太郎　ははは。ええぞ、花子。なんか知らんがやんちゃな娘がおって私は楽しいわ。
月子　花ちゃん、なんてこと言うの？
花子　だって。
月子　女の子はお嫁に行くのが一番ええの。

あんたは若いから夢みたいなことばっかり言うてるのよ。

花子　じゃあ、月子お姉さまは、うちの家みたいなうす味の料理作って女の華を散らすつもり？

雪子　花子。

花子　本当のことよ。うちの高野豆腐、よそのと違ってまずいもん。

一同はシーンとなる。育子は泣きだして奥の部屋へ行ってしまう。
追い掛ける雪子、月子。花子はきょとんとしたままだが、
万太郎と千次郎は吹き出してしまう。

【第五場】

１９０５年、明治３８年。万太郎６１歳、育子５１歳、千次郎５７歳、花子２５歳。

万太郎　花子、せっかく来たのに、もう帰るのか？
花子　だって、お父さま。お正月だから寄っただけですもの。
私の忙しいのは知ってらっしゃるくせに。お母さまのお説教も聞いたし、
高野豆腐もちゃんと食べたし、これでお正月の行事はもうおしまい。
万太郎　やれやれ、あいかわらずハッキリしたやつやな。
千次郎　ははは、花ちゃんはそこがええんやな。
花子　伯父さまは私が小さい頃からの味方やから好きやわ。
万太郎　おいおい、好きやなんて、軽口を婦女子がむやみに言うたらいかんぞ、
また姉さんに叱られるぞ。
月子はほんまにお母さんにそっくりになってきたからな。
そうなの。２人が喋ってると同じ顔に見えてくるわ。
花子　お隣の萱野さんとこのこと言われへんわ。

襖を開けて慎太郎５歳と裕次郎４歳が入ってくる。
月子２８歳、育子５１歳も後から登場。

裕次郎　おじいちゃん。ねぇタコあげて。
慎太郎　あかんやろ裕次郎、僕からや。
裕次郎　ええやんか。
月子　これ、慎太郎、裕次郎。甘えたらあきません。
裕次郎　だって、お母さん。タコあげるの下手やねんもん。
月子　しょうがないでしょう、お母さんは女やねんから。
千次郎　私があげたろうか、おじいちゃんは冬は足が痛いから。
慎太郎　ほんと、おっちゃん。
裕次郎　できんの？
千次郎　おお、そらおっちゃんは男やからな。
育子　あなた、ただ今戻りました。
万太郎　うん、生田さんはどうやった？
慎太郎　おばあちゃんにタコ買うてもろうてん。
万太郎　そうか、ほんで、言うとるんか。
慎太郎　おっちゃん、ほんまにタコあげてな。
月子　あんたら、お父さんが戦地にいはるのに、甘えとったらあきません。
慎太郎　はーい。

千次郎　ま、ええがな。竜之助君も旅順で正月ぐらい祝ってるやろう。
月子　そうやとええんですけど。
花子　そんなはずないわ。中国は旧正月やから二月にならんと祝えへんでしょう。
育子　花子、そんな水を差すもんやないでしょう。
花子　ごめんなさい。つい…私って嘘は言われへんのですもの。
千次郎　そのへんは兄さんによう似てるわ。
万太郎　ははは。
花子　その、嘘を言われへんついでに、やっぱり今日言うとこう。
　　お父さま、お母さま、実はお話があるんです。
万太郎　なんや、改まって？
育子　どうしたん？
花子　お父さま、ここのうちの子はお正月に結婚せぇ、そう決まったから
　　月子お姉さまの時もお正月やったんですよね？
万太郎　そうや、めでたいやろう。その方が。
花子　じゃ、私の時もそうして下さる？
万太郎　なんや、お前、惚れた男がおるのんかいな？
　　（頷く）
花子　ははは、なんや。ほんなら早よう言うたらええのに。
万太郎　まぁ、花子。そんなこと急に言い出して…
育子　なんや、花ちゃん。そんなん私らに隠してたらいややで。
月子　でも、反対されるかもしれへんから。
花子　花子にしては気が弱いこと言うで。ははは…
万太郎　どんな人なんや？
千次郎　アメリカ人。
花子　そうか、アメリカ人か…アメリカ人やと！！！！！
万太郎　まぁ！
育子　花ちゃん。
月子　えらいこと言い出しよったな、また。
千次郎　お父さま、ほんまにええ人なんです。私の事ええ加減になんて
花子　思うてはれへん人です。その証拠に結婚して一緒に向こうに
　　行こうて言うてくれてはります。
育子　向こうってアメリカに？
花子　ううん、しばらくはヨーロッパに別荘があるから、そっちへ行こうって、
　　言うてはります。
千次郎　別荘。えらい金持ちやないか。
花子　アメリカのケリガン一族という財閥のお方なんです。

万太郎　お父さま、お願いします。一度会って下さい。
育子　きっと彼の人柄が分かりますから。ねぇ、お願い。
花子　そら、会わんでもないけど。
　　あなた。
　　（遮るように）本当？嬉しい。お父さまなら会ってくれはると思ってた。
　　我が家はお正月に結婚をするんやって言うたら、
　　彼も喜んで今日来てくれてるの。
万太郎　今日？今日って、今かいな、そんな急展開な…。
花子　第一さっきからお前がここにおるのに、どこにいてたんや？
　　表の自動車で待っててくれてるんです。もし、わたしが今日お父さまに
　　言い出されへんかったら、このまま一緒に帰ろうと思って、
　　待っててもらっていたの。
慎太郎　自動車？すごい、花ちゃんおばちゃんの自動車なん？
花子　うん、そうや。見ておいで。
慎太郎　ほんま？裕次郎、行こう。
裕次郎　うん。（子供たちが出ていって騒いでる。）
月子　花ちゃん、あんた、そんなアメリカやなんて、騙されてるのんと違うの？
　　御曹司なんてそこらへんにウロウロしてるわけやないでしょう？
　　どこで知り合ったん？
育子　月子、この子に言うても手遅れやわ。
月子　そうかて、お母さま。

　　そこに、ケリガン氏が入ってくる。そっと慎太郎と裕次郎も。

花子　ジョージさん。
ジョージ　花子さん。
花子　お父さまこの人が、アラン・ジョージ・ケリガンさんです。
万太郎　わちゃー、ほんなら冗談やないんか。
ジョージ　（万太郎に両手をついて）お父さま、花子さんをワタシに下さい。
万太郎　ははは、こらええわ。外人がわしにお父さまって言うたぞ、おい。
　　あははは、花子。でかした、でかしたぞ。なぁ君？
育子　はい、あなた。
千次郎　兄さん！義姉さん！ほんなら認めるんですか？
月子　お父さま？お母さままで…。
万太郎　ええやないか、これから日本は世界の日本になるっちゅうてるんや。
　　アメリカさんと結婚ぐらい当たり前やないか。なあ、花子。

花子　お父さま、ありがとうございます。（母を見る）
育子　（笑って落ち着いている）あなたの好きなようにしたらええわ。
花子　ありがとう、お母さま！嬉しいっ、お母さまにはまたお説教されると思ってたのに。
育子　ほほほ…もう、お説教の届く範囲やないもの。
花子　ありがとうございます。ジョージ、良かったぁ。
ジョージ　オゥ？
花子　ＯＫよ。私たちＯＫなのよ。
ジョージ　オー、ありがと、ありがと花子さん。（二人は抱き合う）
月子　きゃー、なんてことを人前で。慎太郎、裕次郎、見たらあきません。
万太郎　ははは。
花子　お父さま、お母さま。ほんなら私たち今からジョージの家に行ってご報告してきます。
万太郎　そうか、ほんなら気をつけてな。
月子　慎太郎、裕次郎。花ちゃんおばちゃんに結婚おめでとうって言いなさい。
花子　お姉さま。ほんなら賛成してくれるのね？
月子　あんたは私が反対しても聞き分ける子やないもの。
裕次郎　おまでとう。
慎太郎　あほ、おめでとうや。
裕次郎　明けましておめでとう？
千次郎　ははは、裕次郎にはまだなんのことか分からへんわな。
月子　玄関まで送っていくわ。
千次郎　私も行くわ。兄さん、義姉さん、帰りますわ。また来ます。
育子　お気をつけて。
千次郎　はい。
慎太郎　おっちゃんも帰るの？
千次郎　ああ、また来るわ。花子、おめでとうさん。
花子　ありがとう、伯父さま。
万太郎　ジョージさん、花子をよろしくお願いします。
ジョージ　ＯＫ、オトサマ、ダイジョーブ。
花子　じゃ、私たち行きます。ジョージさん、行きましょうか。
ジョージ　はい、では、サヨナラ。バイバーイ。
裕次郎　あ、ババァって言うた、おじいちゃんはジジィやで。
千次郎　ははは、裕次郎はおもろいなぁ。

花子、ジョージ、千次郎、月子が玄関の方へ退場。

【第六場】

１９０６年、明治３９年。万太郎６２歳、育子５２歳。
二人とも花子の結婚式の帰りである。

万太郎　ふぅー、やれやれ。綺麗やったなぁ花子は。
育子　そうですわね。
万太郎　教会ちゅうとこに初めて入ったが、なかなか荘厳でええもんやな。
育子　はい。
万太郎　さぁて、これで３人とも嫁に行ったなぁ。
育子　はい、無事に行ってくれました。ほんまに肩の荷が降りましたわ。
とくに花子はお嫁に行けるんやろうかと気をもんでましたから。
万太郎　ほんまや、ははは。月子も、子供らもケリガン邸に招待されて
着いていきよったが、ええんかいな。
育子　外国の方の家に泊まるなんて、滅多にない経験やから、
月子も子供らに見せてやりたかったんでしょう。
万太郎　そうか、そやな。雪子も久しぶりに一緒におるし、ええか。
育子　あなた、こんな日に申し訳ないんですけど…
万太郎　どうした？
育子　せっかく２人きりになれたし、今日が一番言いやすいかと思って。
万太郎　かまへん、なんや、改まって？
育子　はい、実はこれをお納め下さいませ。
万太郎　なんや？（育子から渡された封筒を見る）離縁状？何や、君…？
育子　長い間、お世話になりました。
万太郎　いや、ちょっと待ってくれ、どういうことや？
育子　以前から、花子が嫁ぐことが、私の最後の筋やと思ってました。
男子を産んで、鈴木の血を絶やさないようにすることの役目を
果たせなかったことだけ申し訳なく思っております。
万太郎　何を言うてるんや？
育子　しかし、それは月子が私の代わりに果たしてくれました。
あの子も戦争で未亡人になりましたが、この家に男の子を２人も
入れてくれたのですから、十分に跡取りだと思っております。
万太郎　いや、しかし…なんで出て行くんや？
育子　愛想が尽きておりました。
万太郎　え？
育子　１８歳で嫁いできて、女らしいことの何ひとつ出来ない私を
かばって下さった、あなたには本当に感謝しております。

万太郎　ほんなら…
育子　でも、男子とは筋を通すもの。例え一時の平和が目の前に
ぶらさがっていようとも、堪え忍ぶものでございます。
良き妻の修業を望んでおりました私が、結局まずいものしか作れない女に
なったのは、あなたの誉め方に筋が無かったからです。
男の子の無かった我が家で、父から武士になれよと教育され育った私には、
どうしてもあなたの柔らかい性格が呑込めませんでした。
万太郎　育子。
育子　どうぞ、私のワガママをお受け入れ下さいませ。
万太郎　ははは。こらええわ。娘が嫁に行った日に離縁かいな。
お前も芯の強い女やなぁ！
育子　あなた？
万太郎　よっしゃ、ええぞ育子、離縁状確かに受け取った！
育子　まぁ、でも、そんな簡単に…
万太郎　自由や、誰もが自由になれるのが明治のええとこや、わしは明治に生きてる。
お前も明治の女や。俺がまずいと言わんかったばっかりに、
お前がうまい料理を作れんかった。なるほど筋は通ってるで。
育子　そんな腑抜けは離縁されても仕方がないわ。
万太郎　あなた、そんな風には思わないで下さいませ。私が武骨者なだけですから。
ははは。なに、気にせんでもええ。
育子　ほんまにお前の方が俺より遥かに男っぷりが上やな。
万太郎　あなた。
育子　そやけど、育子、ここを出ていって食べていけるんか？
そんなご心配までしていただくなんて、やっぱり私は果報者ですね。
ご心配下さいませんよう。実は卒業した女学校の恩師がそこの校長を
務めていたんですが、今年退職するので後任に来てくれないかという
お話をいただいてます。
万太郎　そうか、そらええわ。君は学校の校長に向いてる。
育子　女学校ですので、料理にも力を入れた学校教育を促進していくつもりです。
万太郎　料理なぁ。

２人は顔を見合わせて笑う。

育子　男勝りだけではいけませんから。
万太郎　耳が痛いなぁ…。
育子　あなた、本当に今までお世話になりました。

万太郎　いや、こちこそ世話になりっぱなしやったなぁ。
育子　お体をお大事になさって、孫たちとも仲良く暮らしていって下さいませね。
万太郎　君も時々は遊びに来たらええがな。
育子　そんな、とんでもないですわ。
万太郎　ええがな。さて、そうと決まったら最後の酒盛りでもしようやないか。
育子　そんなことしたこと無かったしなぁ。
万太郎　はい。
育子　よし、飲もう！熱燗つけてくれ、お、なんぞアテはないんか？
万太郎　すみません、お正月なんで、私の作ったおせち料理しかないんです。
育子　最後の一撃か。
万太郎　まぁ、あなた！
育子　よっしゃ、君の作ったもんを食うて、初めて正直にまずいと言うか。
万太郎　面と向かって言われるのは嫌ですわ。
育子　なんや、筋を通す言うてるのに。
万太郎　まぁ！
育子　あはは。
万太郎　ほほほ。
育子　さぁ、食おうか。
万太郎　はい。

２人は奥へ、とても別れるとは思えないほど幸せそう。

【第七場】

１９２４年、大正１３年、万太郎８０歳、裕次郎２３歳。
隣の萱野さんが来て縁側に座っている。

萱野　そうでんねんがな、いえ、うちの娘の炊いた黒豆ですねん。
万太郎　ほうほう、そうですか。
萱野　いやー、楽しみやねぇ、慎太郎くんのお嫁さん。
うちの娘貰うてもらおうと思ってたのに。
万太郎　しかし、洋子ちゃんはもう嫁に行きはったんでしょ？
萱野　いややわぁ、それは私のことですやんか。
万太郎　いや、お宅の女性はみんな似てはるから上も下も…。
萱野　何を言うてはるんですか、冗談ばっかりもう！
いや、うちの娘ってまだ3歳の子ですねんけど。
万太郎　いや、あのね…

裕次郎が飛び込んでくる。

裕次郎　来た来た。おじいちゃん、来たで。
万太郎　来たか。
裕次郎　あ、おばちゃん。おめでとうさん。
萱野　何を言うてるの、うち、洋子姉ちゃんやんか！
裕次郎　嘘！自分、おばちゃんにそっくりやな。
萱野　ほんまに冗談の好きな一家やなぁ。
裕次郎　なんやそれ、まぁええわ。立て込んでるねん、また後でな。
萱野　あ、そうかそうか。ほな、おじいちゃん帰ります。
万太郎　はいはい、おおきに。
萱野　またお嫁さんの顔見に寄せてもらいます。

萱野は戻っていく。玄関先を気にする万太郎。

万太郎　ほんで、どんな子や？
裕次郎　ガッチリしとんな。あ、兄貴も緊張しとんで。おもろいな。
万太郎　そら、東京から嫁を取るんや、緊張のひとつもせんかいな。
裕次郎　何言うてるねんな、花ちゃんおばちゃんなんかアメリカへ行って、
今や「ケリガンお花」ちゅう芝居になってんねんで、東京がなんやねんな。
万太郎　花子は別誂えや。あいつは小さい頃から気の強い子やったからな。

裕次郎　来た来た。おじいちゃん、早よう、上座に行き。
月子　ただいま。
裕次郎　お袋や。（自分も飛ぶように走って座る）

月子４７歳。慎太郎２４歳、ハル１９歳が入ってくる。

月子　ただいま。遅くなりました、お父さま。
慎太郎　おじいちゃん、ただいま帰りました。
万太郎　うんうん。
慎太郎　こちらが、暮れに東京で仮祝言をあげてきた、高田ハルです。
ハル　おじいさま、不束者ではございますが、よろしくお願い申し上げます。
万太郎　いよっ、この、不束者。
ハル　は？
月子　お父さまったら。御免なさい、ハルさん。父はこの頃とんと軽ぅなってしもてるんよ。年寄のおふざけやから気にせんといてね。
裕次郎　ジジィ、怒られとんで。
月子　これ、裕次郎。おじいちゃんに向かってジジィとはなんですか。
裕次郎　はいはい。
月子　返事は１回でよろしい。
裕次郎　はーい。
月子　伸ばさんでええの。
裕次郎　はい。
ハル　うふふ、裕次郎さんですか。ハルです。よろしくお願いします。
裕次郎　あ、どうも。
月子　ちゃんと挨拶しなさい。
裕次郎　明けましておめでとうございます。
月子　裕次郎！
慎太郎　まぁまぁ、お母さん。裕次郎はテレてるんですわ。
月子　ほんまに、あんたとひとつしか歳はかわらへんのに、なんでこんなにぐうたら者やねんやろう。
万太郎　月子、そんなことはええから、早よう祝言をせぇ。
月子　あ、はい。そうでしたわ。うちではまだ三三九度をあげてへんねんやった。
裕次郎　裕次郎、杯持ってきて。
裕次郎　はい、はい、はい、はいはーい。
月子　裕次郎！もう、ほんまに。ごめんなさいね、ハルさん。
さぁ疲れてるやろうけど、三三九度してね。父がこの家は代々みんな

お正月に結婚するように決めて以来、習慣になってるのよ。
もう、東京で済んでたのに。

ハル　いいえ、東京は去年の震災でうちが仮住まいのままでしたから、ここの方が昔からのお家で落ち着きますわ。

万太郎　震災はどうやったんや？東京は地震があるから恐いな。

月子　ほんまやね。こっちは無いから安心してお嫁に来れるわ。

慎太郎　それだけで来るんか？

ハル　そんな、私はそんなつもりは…

慎太郎　ははは、嘘や。ごめんごめん。

月子　もう、やめなさい。ごめんね、ハルさん。この子ら2人とも父親を早くに亡くしてるから、おじいちゃんっ子で、いっつもこんなことばっかり言うのよ。

万太郎　なんや、わしのせいか？

裕次郎が杯と酒を持ってくる。

万太郎　さあ、ほんなら。形だけやけど、うちのお正月にふさわしい、めでたいこと続きの式にしょうか。

慎太郎　はい。

裕次郎が2人に酒を注ぐ、2人は盃を交わす。

万太郎　ええな。若い嫁が来るとなんか華やかでええな。や、おめでとうさん。末永ごうにやりや。慎太郎、少ないけどこれは祝いや。

慎太郎　おじいちゃん、ありがとう。

ハル　ありがとうございます。

月子　さあさ、ほんなら、おせちを食べてみんなで生田さんへ初詣に行きましょうか。

ハル　あ、お義母さん。私、母からこれを預かってきたんです。

月子　なに？

ハル　お口に合わないでしょうけど、お正月の用意もそこそこに東京まで迎えにきていただいたんで、きっとあっても困らないからって…

月子　あら、まぁ。おせち料理を？ちっとも知らんかったわ。

ハル　あんた、長旅やったのに持ってきたの？まぁまぁ、すんませんねぇ。たくさんないんですけど、私の作った高野豆腐もありますんで。

裕次郎　でた。高野豆腐。

慎太郎　裕次郎。
ハル　なんですか？
裕次郎　いや、なんでもないです。へぇ、お義姉さんの高野豆腐か、戴こうや。
　な、兄さん。
慎太郎　うん、そうやな。
月子　そうね、せっかくやし。そやけどハルさん、これはこれとして
　うちの味も覚えてね。母の代から高野豆腐には家の味があるから。
ハル　そうなんですか。それじゃ、私のなんか…
万太郎　うまい。
裕次郎　あ、ジジィ。もう食うてる。
万太郎　メチャクチャ旨い。
月子　ほんと？どれどれ、私もご相伴に預かろう。あらら、真っ黒やね。
　お醤油使い過ぎるんちゃう？
裕次郎　ほんまや、うちのんと交互に並べたら白黒の市松になんで。
ハル　すいません、わたし。関西の薄味もこれから勉強します。
万太郎　せんでええ。これは旨い。
慎太郎　いただきます。
裕次郎　いただきます。

一同はそれぞれ口にする。

慎太郎　辛～っ。
裕次郎　わっ、これすごいわ。
月子　う、う～ん。
万太郎　旨い。
ハル　ごめんなさい。
月子　ハルさん、これはちょっと…
万太郎　いいや、旨い。これからはこの味をうちの味にしよう。
　慎太郎、裕次郎お前ら、それでええな？
慎太郎　はぁ。
裕次郎　いきなりやなぁ、おじいちゃん。
　これはこれですごいで、極端やわうちの高野豆腐。
万太郎　いいや、これにしょー。わしと千次郎が出て行った母さんの高野豆腐を
　まずいと言わへんかったばっかりにこんなことになったんや。
　嘘をつけへんのがわしの、たったひとつの長所なんや。
　男、鈴木万太郎８０歳にして遂に自分で蒔いた種を刈り取れる

日が来た。ハルさん、よくぞうちの嫁に来てくれた。
今日からこの味が新しい鈴木家の味や。月子もええな。
私はお母さまに教えていただいた味が一番です。
それは悲劇や。育子はええ女やったが、料理だけは大笑いやった。
お前がそれまでそっくりに受け継いで育つとは思わんかったんや。
なんか、すいませんねぇ。わたしの料理がヘタクソで。
まぁ、そう怒りな。お前のせいやない。ともかく今日からこの味が
うちの味や。よし、わしがこれを元旦に結婚する家風と共に決めとこう。
一筆書くぞ。
ええ？本気で言うてはるんですか、お父さま。
嘘気でどないすんねん。裕次郎、紙と筆の用意せぇ。奥の書斎で書くで。
言い出したらきかんな、おじいちゃんも。はいはい。
あほ、返事は1回でええ。
はい、分かりました。（奥へ行く）
あの、これもご冗談なんでしょうか？
父は本気やわ。よっぽどあなたの辛口の味付けが刺激になったんやろうね。
そんな、お義母さん。私はそんなつもりで…
分かってます。そんな泣き顔にならんでも。いややわ、怒ってへんわよ。
父に呆れてるだけ、ハルさんのせいやないですとも。

裕次郎は血相を変えて入ってくる。

えらいこっちゃ、ジジィ死んだで。
あほな冗談はやめろ。さっきからハルが怯えとるやないか。
冗談でこんなこと言うか。ほんまや。書くだけ書いて俺に渡したら
大笑いして、そのままプッと逝ってしもたで。
お父さまらしい最期やわ。
感心してる場合やないで、お母さん。
そうですわ、ともかく奥へ。
そうやね。お母さまにも報せんとあかんわぁ。

一同はガヤガヤと奥の部屋へ行く。

【第八場】

１９２７年、昭和２年。慎太郎３０歳、ハル２５歳。裕次郎２９歳。
裏木戸に女の声、家の中に向かって呼んでいる。

レイ　あのー、すんません。
ハル　（奥よりハル登場）はい、どちらさまでしょうか？
レイ　どうも、ここ鈴木裕次郎さんの家ですよねぇ…

女が縁側に勝手に座り込んで、ハルはちょっと困惑気味。

ハル　はぁ…で、あの、裕次郎さんを呼べば？
レイ　へぇ、裕ちゃんに話がおますんや。
ハル　それが、あいにく今日は初詣に出掛けてますんで…
レイ　ああ、そうやったわ。今日は元旦でしたね。あはは。おめでとうさんです。
ハル　あ、おめでとうございます。あ、あの今お茶を…。
レイ　おおきに。

そこに慎太郎が帰ってくる。

慎太郎　ただいま、育子おばあちゃんから年賀状が来てるわ。
　　達筆な人やなぁ相変わらず、今年は行かへんかったけど、元気そうやな。
ハル　あなた、お帰りなさい。
慎太郎　なんや、正月早々お客さんかいな。
ハル　違うのよ、それが変なの。
慎太郎　なんや？何が変なんや？あれ…
レイ　いやー慎ちゃんやないのぉ。
慎太郎　大塚のお母ちゃん…（ハルに隠して）ああ、あんたかいな。
レイ　なにや、冷たいなぁ。知らん顔かいな。
ハル　あなたお知り合いなの？
レイ　お知り合いって、上品な知り合いちゃいまっせ。なぁ慎ちゃん。
慎太郎　お母ちゃん、止めてぇな、なんやねん、正月早々。
レイ　裕ちゃんに会いに来たんや。
慎太郎　なんで？
ハル　あなた？
慎太郎　あ、あのなぁハル、ちょっとこの人と話があるんや。
　　ごめんやけど奥に行っててくれへんか？

ハル　…はい。
慎太郎　裕次郎のことで込み入ってるんや、な？
レイ　ああ、奥さんかいな？ごめん。ごめん。
慎太郎　アホ、そんな言い方したら、俺も何かあるみたいやないかっ。
レイ　ごめんって、そやから。
ハル　あなた、この方は？
慎太郎　もう…しゃーないなぁ…飛田のなぁ…大塚屋ちゅう店の女将や。
ハル　飛田？
レイ　そう言うても分かれへんほど、ウブな奥さんがおるんやなぁ。
意外やわぁ、遊び人の鈴木兄弟やのになぁ。
奥さん、教えてあげまひょか？飛田ちゅうのはな色街や。
ハル　え？
レイ　もう、恥かかさんといてぇな。そやから男が遊びにくるとこや
って言うてますねんがな。
ハル　そんな…
慎太郎　ハル、ちゃうがな。わしが行ってるんやないで、裕次郎が行ってるんや。
なぁお母ちゃん。
ハル　でも、知り合いなんでしょ？
慎太郎　う、うんまぁ、あの…あいつが料理屋に連れて来たことがあったさかいに。
ハル　料理屋？そんなとこにも行ってるんですか？
慎太郎　あ、あの…な？
レイ　あははは、どうしようもないなぁ、慎ちゃん。
慎太郎　あほ、あんたも何とか言うてぇな。
レイ　奥さん、心配せんでもええで。別に、あんたの旦那に
いちゃもんつけに来たんとちゃう。裕ちゃんに用事があるんや。
慎太郎　裕次郎がなんぞしたんかいな？
レイ　君子に子が出来てしもてなぁ。堕ろさせるにしても、
お金出してもらわんと困るさかいになぁ。代わりに来たんや。
慎太郎　子供？
レイ　そうやねん、ここんとこ、あの子のお客は鈴木兄弟ばっかりやったんや、
他に誰の子でもないわいな。
ハル　鈴木兄弟…兄弟って、じゃあ、うちの人も入ってるんですか？
レイ　あ、ごめん。口がすべった。
慎太郎　今のはわざとやろう？
レイ　まぁええやんか。慎ちゃんが１０回に１回くらいの割合や、どう考えても、
数は裕ちゃんの方が多いわいな。そやから裕ちゃんの子やと思うねん。

慎太郎　おいおい、あいつほんまに妊娠してるんか？
レイ　女郎のくせにどん臭いやっちゃなぁ。
慎太郎　堪忍したってぇな。女郎も人間やさかいなぁ。ドジも踏むわいな。
レイ　しゃあないなぁ…
慎太郎　そやさかい、裕ちゃんが帰ってくるまでここに居らしてもらうで。
　あほ、そんなんあかんわ。お袋が子供ら連れて戻ってくるんや、
　居座られたら困るわ。
レイ　ほんなら、慎ちゃんがお金出したりぃな。
慎太郎　俺が？
レイ　どっちかの種には間違いないねんから、あとで弟から貰うたらええがな。
　うちの店は、どっちからでも払うてもろたら、それでええで。
慎太郎　ええでって…なぁ？（ハルを見る）
ハル　な、何をおっしゃってるんですか！なぁってなんですか。
　あの、その君子さんですか。
レイ　ん？
ハル　その人、産むべきです！
レイ　なんて？
ハル　あの、子供は産むべきです。堕ろすなんてそんなこと！許せません。
　ましてひょっとしたら主人の子供かもしれないなら尚更、
　産んでもらって下さい！私が育てますから。
慎太郎　ハル？
レイ　（きょとんとしてる）あはははは！
ハル　なんですか？
レイ　あー、面白い！この奥さん、よう出来た子やな。
ハル　私？
レイ　良かったなぁ、慎ちゃん。こんな真っ直ぐな嫁はんもろうて！
慎太郎　お母ちゃん。
レイ　ごめん、ごめん。奥さん、もうええわ、嘘や。
ハル　え？
レイ　ややこ、嘘！
ハル　ややこ？
レイ　あんた東の人かいな。ややこ、子供のこっちゃ。
ハル　ああ、子供のことをややこって言うんですか…え、嘘？
レイ　いや最近ちょっと2人とも、うちの店お見限りでなぁ、
　君子も干上がったままや。そろそろ引かさんといかん歳やし、
　ややこを堕ろす言うたら、なんぼかまとまったもんになるやろ思てな。

元旦で財布の紐も緩なってるやろから、奇襲攻撃かけたんや。
ハル　まぁ…。
慎太郎　なーんや。
レイ　女郎屋の奥の手や。覚えとき。
ハル　なに言ってるんですか！
レイ　けど、今日はあんたの真っすぐなんに負けたわ。
芝居してるのがアホらしなってきた。
慎太郎　嘘かいな。もう頼むでお母ちゃん。
レイ　堪忍、そうかて長いこと来てくれへんかったがな。
慎太郎　すまん、すまん。
ハル　バカにしないでよ！（いきなり立ち上がる）
あんた、失礼よ。正月早々、人の家に乗り込んできてなにが奇襲攻撃よ、
奥の手よ。ただのゆすりじゃないの！
慎太郎　ハル？
ハル　あなたもあなたよ！女郎買いするなら、きっちりしたらどう？
中途半端にいい顔するから付け込まれるんです！
慎太郎　うーん、そら言えてるわ。
ハル　ばかやろう！反省しろっつってんだよ！
慎太郎　ハル？
ハル　あ、ごめんなさい。私つい…下町言葉が。
慎太郎　かっこええなぁ、惚れ直したわ。
レイ　気に入った、奥さん、あんたええな。今から飲みに行こうか？
ハル　へ？
レイ　正月くらいええがな。その気っ風が気に入った。この大塚屋の女将が
おごらしてもらうで。神社の屋台まで行こうや。
ハル　あの…
レイ　行く、行かへん、どっち？
ハル　行きます。
慎太郎　ハル？
レイ　よっしゃ、思うた通りええ度胸や。
慎太郎　おいおい、ほんまに行くんか？
レイ　慎ちゃん、留守番しとり、嫁はん借りるで。
ハル　あなた、いいでしょ？
慎太郎　お前は、ほんまに好奇心旺盛な女やなぁ。
ハル　ごめんね。お義母さんにうまく言っておいてね？
慎太郎　なにがごめんねや。

レイ　何言うてるねん、普段遊んでるねんから、たまには嫁孝行しぃな。
慎太郎　はいはい…。
レイ　さぁ、いこか。
ハル　はい！
レイ　なんか、面白い正月やな。
ハル　ほんと。
慎太郎　おーい、ハル、早う帰って来いよ。（ひとりでしーんとした居間に座り込む）
なんか、あいつ変わってるなぁ…。

そこへ裕次郎が帰ってくる。

裕次郎　ただ今、兄貴。なんや、ひとりか？義姉さんと子供らは？
慎太郎　あれ、お袋もいてないやん。
裕次郎　なにが、ひとりかや。大変やってんぞ！
慎太郎　何が？みんなどうしてん？
裕次郎　やかましい。俺は今から飲み直すぞ。
慎太郎　ええな、外冷えるわぁ…燗つけよか？
裕次郎　呑気な奴っちゃで。アテないで。おせちしか。
慎太郎　ええがな、義姉さんの高野豆腐あるねんやろう？
裕次郎　あれがひとつあったら、なんぼでも飲めるわ。
慎太郎　ほんま、あいつ水と醤油の違い分かってるんかなぁ…。
裕次郎　まぁまぁ、ええがな。
慎太郎　なぁ、裕次郎、ハルってええ女やなぁ。
裕次郎　何言うてるねん、自分の嫁はん誉めて、気色悪いなぁ。
慎太郎　やっぱり嫁はんに一番惚れてる俺はあほかな？
裕次郎　っていうか、男がそんなこと言いなって。
慎太郎　そうか？（２人は奥へ）

【第九場】

１９３５年、昭和１０年、慎太郎３８歳、ハル３３歳、裕次郎３７歳。
慎太郎に子供たちがいる。上から慎一１３歳、慎助１２歳、慎吾５歳。
玄関から慎一、奥から慎助と慎吾が登場。裕次郎はフランス人、ジャンと一緒。

慎助　おっちゃん、帽子と上着持ってきたで。
裕次郎　ありがとうな。
慎一　おっちゃん、中国行ってどうすんの？
裕次郎　あほやな、中国にはべっぴんさんばっかりおるねんで。
　あっち行って李香蘭みたいな子と結婚しょうかな。
慎太郎　もう、やめとけよ女遊びしに行くんかいな。
ハル　裕次郎さん、ジャンさんもご無事で行ってらっしゃいませね。
ジャン　メルシーマダム。
裕次郎　ありがとうございます。お義姉さんも、お元気で。
　さぁ、お袋に手も合わせたし、ちょっと行ってくるわ。
ハル　ほんと、裕次郎さんは気楽にどこにでも行けそうね。羨ましいわ。
慎太郎　裕次郎、中国から手紙よこせよ。
裕次郎　分かってる、落ち着いたら連絡するわ。
　千次郎おじさんにもよろしく言うといて。
慎太郎　千次郎おじさんなぁ、最近はめっきり田舎にこもって出てきはらへんけど、
　手紙でも書いとこか。
裕次郎　しゃーないで、もう９０近いんやから、元気なだけびっくりするわ。
慎太郎　ほんまや。さすがはおじいさんの弟やな。
裕次郎　ははは、ジジィも大往生やってんから、あの人もそうやできっと。
　慎一、慎助、慎吾。ほんならな。中国からなんぞ送ったるさかい。
　なにがええか言うてみ。
慎一　ぼく、絵はがきがええな。きれいな景色のんが。
慎助　ぼくは大陸の海洋地図。
裕次郎　ははは、ひとつ違いの兄弟でも。お前らはえらい性格がちゃうな。
　よっしゃ、よっしゃ。慎一が絵はがきで慎助は地図な。
慎助　海洋地図やで、おっちゃん。ぼく、海軍に入るねんから。
裕次郎　海軍か、そら格好ええわ。海軍日本やからな。
慎太郎　士官学校の試験を受けるいうてきかへんのや。
　どないする、うちから偉い軍人が出たら？
裕次郎　ええがな、鈴木の家にも真面目な人間がおったいうことや。
　兄さんの息子とは思われへんな。

慎太郎　今の子はみんなしっかりしとんで。我々みたいな大正の遊び人には
ついていかれへんわ。
裕次郎　あ、そやそや。慎吾はなにがええねん？おっちゃんの土産？
お前だけチビやから忘れるとこやったわ。
ハル　慎吾はまだ5歳だから、なんにもいりませんわ。
それよりも体に気をつけて。大陸は寒いそうですから。
裕次郎　分かってます。お義姉さんこそ、こんな戦争の起きそうな不安定な世の中や、
男の子ばっかりで気がもめるやろうけど元気でいて下さいね。
ハル　ありがとう。
ジャン　裕次郎。（時計を見せる）
裕次郎　ウィ、ウィ。ほんなら、兄さん。船の時間があるから行くで。
慎太郎　おう、気をつけてな。
裕次郎　お前ら、俺の言うことでもないが、お父さんとお母さんを大事にせえよ。
慎一　はい、いってらっしゃい。おっちゃん。
慎助　いってらっしゃい。
慎吾　らっしゃい。
裕次郎　絵はがきと海洋地図やな。心配するな、慎吾にもちゃんと何か送ったるで。
慎吾　うん。

慎太郎とハル、子供たちは裕次郎を見送って玄関へ。

慎一　ジャンは何人なん？おっちゃんウィウィ言うてたな。
慎太郎　さぁフランス人やと思うけど、昔見た花子おばちゃんの
旦那とよう似てるわぁ。
ハル　本当？
慎太郎　そっくりやで、外人はみんな同じ顔してるから何人か分かれへんな。
ハル　向こうも日本人と中国人は一緒だって言ってたじゃない。
慎太郎　アホ、日本人と中国人は全然ちゃうで。
ハル　どっちでもいいわ。さて、それじゃあお餅でも食べましょうか。
慎吾　わーい、お餅や。
慎一　お母さん、ぼくが焼く。
ハル　あらそう。じゃ、やってちょうだい。慎一は料理が好きね。
慎一　だってぼく板前になるねんもん。
慎太郎　おいおい、ほんまかいな。そんなこと初めて聞いたで。
慎一　前に言うたわ、お父さん、あの時はええぞって言うてたのに。
ハル　あの時、お父さんは酔っ払ってたのよ。覚えてないわ。

慎一　もう、いややな。酒に飲まれたらあかんで。
慎太郎　やかましい。１３の息子になんで酒の意見されなあかんねん。
ハル　母さん、慎一を味方につけてずるいぞ。
慎太郎　わたしじゃないわ。慎一が勝手にしてるんですよ。
慎吾　ほんまかいな。
ハル　ほんまかいな。（口真似をする）
慎太郎　あらら、慎吾はお母さんより関西弁が上手ね。
ハル　そらそうや、ここで育ったんやから。
慎太郎　あら、わたしも今は喋れますわ。
ハル　嘘つけ、それが関西弁か？東京弁にもほどがあんで。
慎太郎　知らない。
ハル　知らない、って。ほらみてみ。それがあかんちゅうねんがな。
慎太郎　ここは「ほっといて」と言うところやろ。
ハル　意地悪ね。
慎助　お父さんもお母さんもやめて下さい。日本全体の事をみんなが考えなきゃならないのに、東京が、大阪がなんて言うて夫婦喧嘩してる時じゃないでしょう？
ハル　慎助…お前。
慎一　もう。ええやないか、慎助、お前変やぞ。お母さん、お餅焼こうや。こいつ今から軍人の気でおるわ。
ハル　慎一。
慎一　いくら、戦争が始まっても親にそんな口きくな、あほ。１２で戦争に行くつもりか。
慎太郎　もう、やめとけ。慎一。慎助もお父さんはええけど、お母さんには謝りなさい。
慎助　ごめんなさい。
ハル　ううん、お母さんがお父さんに文句言ったから悪いのよね。ごめんね、慎一も慎助も。
慎一　もうええやん。お餅焼いて、おせちの用意しようや。慎助、手伝えよ。
慎助　うん。

少し戸惑いながら、ハルと子供たちが奥へ。

【第十場】「
１９４２年、昭和１７年。慎太郎４５歳、慎吾１２歳。

慎太郎　慎吾、郵便局は今日やってるかな。
慎吾　知らん。なんで？
慎太郎　これを持って行ってこい。
慎吾　また？お母さんは届くと思ってるんやろうか？
慎太郎　知らんがな。母さんは南方にやられた慎一の事を考えたら
書かんとおれんのやろ。
慎吾　でも、慎一兄さんから手紙なんて、返ってきたことないやん。
慎太郎　お前は意固地な性格やな。母さんが満足したらそれでええんや。
慎吾　だって、届けへんのに出して、無駄なことするねんやったら、
やめといた方がいいもん。
慎太郎　きーっ。もうええ、わしが行く。
慎吾　どうぞ。
慎太郎　あのなあ、慎吾。仮にもわしは親やで、親のわしが正月早々から郵便局に
行くと言い出したら、子供のお前は「どうぞ」じゃすまんやろ？
慎吾　だって、自分で言うたんやもん。言うたことはそのままにしか取られへん。
人間は言葉を信用して生きてるんや。
慎太郎　お前はなぁ、絶対に他人とうまいことやっていかれへんぞ。
慎吾　いいよ。ぼく、ひとりでも平気やもん。
慎太郎　あ～イライラする。もう、一生言うとれ。
ハル　あなた、大変です。
慎太郎　どうしたんや、母さん？
ハル　これ、これが慎助に。
慎太郎　赤紙か？なんや、けたたましい、正月やちゅうのに。
慎助　赤紙じゃありません。出動命令ですよ。自分は職業軍人なんですから。
慎太郎　慎助、そんな冷静になにを…
慎助　お父さん、３日に南方へ出動することになりました。
本日は１日だけの休暇です。自分は上官の家にも新年の挨拶に行かねば
なりませんので、ご報告にだけ戻ってまいりました。
ハル　そんな、今日ぐらいゆっくりしていけないの？
慎助　すいません、お母さん。しかし、今は戦争中なんです。
お母さんのおせちもいただきましたし、思い残すことはありません。
慎吾　兄さん、行くの？
慎助　ああ、慎一兄さんと俺が行ったら、子供はお前だけや。

お父さんとお母さんを大事にしろや。

慎吾　ぼくも行く。

ハル　慎吾！

慎助　ああ、そのうち赤紙が来たら来い。先に行って待っててやる。

慎吾　うん。

慎助　じゃ、お父さん。行ってきます。夜には戻ります。

慎太郎　ああ。

出て行く慎助をハルが止めようとするが、慎太郎がそれをやめさせる。

慎太郎　見苦しいことはやめとけ。あいつは軍人なんや。

ハル　だって、あなた。その前に私たちの息子なんですよ。

慎太郎　ハル。言うな、今そんなことを大きな声で言うたら、誰になにをされるか分からんのや。国賊やというて警察へ連れて行かれる。

ハル　だって、あなた。あの子は。（泣きだす）

慎太郎　我慢せぇ、我慢してくれ。お前には俺がおるやないか。幸い中途半端な中年は兵隊に取られてへんのや。俺が居るだけましやと思うて我慢してくれ。ご主人も兄弟も子供もおらんようになったお方かていてはるんや。俺がずっとそばに居って守ったる。な？

ハル　あなた。

庭からお客の声、隣の萱野と千次郎９７歳である。

千次郎　こんにちは、明けましておめでとうございます。

萱野　おめでとうさんです。

慎太郎　はい、どなたですか？慎吾、開けてみぃ。

慎吾　うん。（慎吾が障子をあける）

千次郎　こんにちは。（上がってくる）

慎太郎　はぁ。

千次郎　なんや、ポカーンとして。慎太郎やないか。おめでとうさん。

慎太郎　は？あ、あー！千次郎おじさん。

千次郎　なんや、見忘れられとったんかいな。当たり前じゃ、千次郎や。

萱野　なんや、慎太郎さん、忘れたらあかんがな。

慎太郎　ああ、洋子お姉ちゃんも、おめでとうさんです。

萱野　いややわぁ、それ母です。

慎太郎　え？
萱野　娘、娘です、私。洋子は母、晶美ですよ。
慎太郎　ああ、すいません。
萱野　おじいちゃん、お連れしただけなんで、ほんなら。
慎太郎　どうもすいません。
千次郎　おおきに、おおきにな。
萱野　失礼しますぅ。（退場）
慎太郎　いやー、すいません、おじさん。長いことご挨拶も伺ってないから。
　　おい、ハル。千次郎おじさんや。万太郎ジジィの弟の。
ハル　あ、はい。ごめんなさい。
慎太郎　私、随分前に1度しかお目にかかってないものでしたから。
　　おじさん。こんな時節に田舎からよう来てくれはりましたね。
千次郎　大変やったでしょう？
　　いや、わしらはこんなもんなんでもないわ。
慎太郎　どうぞ、どうぞ座ってください。あ、これは一番下の息子の慎吾です。
　　覚えてはりますか？
千次郎　おお、月子の葬式の時はまだ小さかったが、こんなになったんかいな。
　　今いくつや？
慎吾　12歳です。
千次郎　そうか。うん？他のんはどないした？
慎太郎　上は戦争に行ったままです。次男がこの3日に出征することになりました。
千次郎　そうか、まぁえらい世の中や。
　　お国のために頑張ってきてもらわないかんからな。
慎太郎　はい。そやけどおじさん、急に来はるってどうしたんです？
　　汽車の時間でも知らせといてくれはったら、迎えに行きましたのに。
千次郎　いやいや、それには及ばん。なにもたいした用やないんや。ただ、ここは
　　男が多いやろう。それやのに一家7人までの食用油の配給が6合までや。
　　ひとり多い8人やと一升貰えるのに、お国も無慈悲なことするで。
慎太郎　はぁ、ほんまですね。
千次郎　まぁ、ここは5人やが食べ盛りの男の子の数は3人や。
　　ひとり減っても普通の8人家族よりよう食べるやろ。
慎太郎　はい、まぁ。そやけどみんな我慢してますから。
千次郎　そこでや、田舎に引き込んだもんの強みや。ほれ、正月ぐらいなんか
　　食わしてやらんとと思ってなぁ。ちょっとやが餅と米を持ってきたで。
　　子供に食わしたれ。
慎太郎　おじさん、ありがとうございます。

ハル　まぁ。まぁすいません。
千次郎　それと、砂糖と醤油な。わしらは薄味育ちやから使わんのや。
慎吾　お餅や。うわっ、お母さん。見て、あんこの入ったのもある。
慎太郎　ありがとうございます。おじさん、遠いところから、ほんまやったら
こっちからなんか持って伺わんといかんのに。ありがとうございます。
千次郎　鈴木千次郎、齢９７歳にして、ご本家にご恩の仕納めや。
ははは…兄さんが生きとったら「当たり前のことや、俺は兄貴やぞ。」って
言うはるところやな。
ハル　そんな、そんなこと。慎吾、よかったねぇ。
慎吾　うん、ありがとう、おじいちゃん。
千次郎　おう、食えよ。うんと食え。
慎吾　うん、これ食べて強い兵隊になるよ。
ハル　慎吾、なんてことを…やめてちょうだい。

泣いて奥へ駆け込む。追い掛ける千次郎、慎太郎はうなだれてしまう。

千次郎　ハルさん、泣かんでもええ。ハルさん。
慎吾　どうしたん？
慎太郎　（いきなり慎吾をひっぱたく）
慎吾　なにすんの？
慎太郎　よう覚えとけ、俺はお前の親父である前に、ハルの男や。
これ以上、あいつを辛い目に合わせる奴は許さん！

怒って奥へ行ってしまう慎太郎。

【第十一場】

１９４７年昭和２２年。ハル４５歳、明子２０歳、裕太１０歳。
ひとりの男が玄関で叫んでる。慎一２５歳である。

慎一　どなたか、いらっしゃいませんか。鈴木慎一一等兵、ただいま戻りました。
お恥ずかしながら、帰ってまいりましたぁ。
裕太　あっちゃん、誰か来たよ。
明子　え？あれ、うちなんかな。
裕太　だって、玄関に向かって言ってるよ。
明子　ほんまや。誰かな？
裕太　聞いてこようか？兵隊さんの格好してるから、ぼくが行くよ。
明子　大丈夫、戦争は終わってんから。帰還兵の方やわきっと。

明子は襖を開けて対応に出る。不思議そうに入ってくる慎一。

慎一　失礼します。
明子　どうぞ、こちらへ。
慎一　は、しかし。ここは鈴木家じゃないのでありますか？
明子　いいえ、あの。鈴木です。
慎一　私は鈴木慎一と申します。戦前ここに住んでいた家族の元に
帰還してきたのですが、鈴木違いでしょうか？
明子　あの、いいえ。初めまして私、鈴木明子と申します。
慎一さんの家は間違いなくここです。
慎一　明子…さん？
明子　はい、あのう、これは鈴木裕太です。
慎一　お子さまでありますか？
明子　うふふ、いいえ、私はまだ２０歳です。裕太は１０歳、子供じゃありません。
慎一　は、それは失礼いたしました。しかし、その…いくらあなたたちが
鈴木さんでも、うちの家族とは違う鈴木さんでしょう？よくある名前ですし。
明子　なにから言っていいのか…ともかくここは慎一さんのおうちに間違い
ありません。よく、お帰りになって下さいました。ご苦労様でした。
裕太　ご苦労さまでした。
慎一　はぁ？いや、ご苦労様って、そんなことを他人のあなたたちに
言われてもなんだか…
ハル　他人じゃないわ。明子さんも裕太もうちの人よ。（ハル４５歳登場。）
慎一　お母さん。お母さんか？

ハル　慎一、お帰りなさい。慎一。

２人抱き合って泣く。明子と裕太はそれを見ている。

慎一　良かった、生きててくれて。本土もえらい空襲で死んだ人も多かったっていうから、この家が建ってるのを見つけた時には走ってしもた。

明子　それやのに、おったんが私と裕太ではびっくりしはったでしょうね。

慎一　あ、そうや。お母さん、この人ら？

ハル　今、説明するわ。それより、お父さんにご挨拶なさい。

慎一　そうや、親父や。親父はどこにおるの？

ハル　そこから見てらっしゃるわ。（仏壇の方を指差す）何か食べたの？

慎一　いや…。

ハル　明子さん。

明子　はい、裕太お手伝いして。

明子と裕太は台所の方へ。仏壇に手を合わせる慎一。

慎一　（そっと位牌をとりあげて見る）そうか、親父は死んだんか。

なんやこれ？死亡通知…慎吾、慎吾も死んだんか？

なんでや、あいつまだ１７やろう？

ハル　最期の学徒出陣でね、お父さんがまだ子供なのにって言うのをあの子ったらケロリとして「私は大丈夫です。ちゃんと死んできますよ。」って。

慎一　本当に理屈屋だったわね。

そうか、ぼくらの方へは最後は軍のもんなんか何もけぇへんかったから、学生の下士官がおるっていうのも聞いただけやったけど。

慎吾もそのひとりやったんか。

明子がお節の重箱と皿を持って戻ってくる。慎一の前に置かれる高野豆腐。

明子　どうぞ。

慎一　高野豆腐や…（懐かしそうに食べる）旨い…旨いなぁ…。

ハル　その高野豆腐は明子さんが炊いてくれたのよ。

慎一　え？

ハル　明子さんはね、慎吾のお嫁さんなのよ。

慎一　嫁？

ハル　戦争で一家全員亡くされてね、空襲の時にたまたま助け合いして知合ったの。

慎吾が兵隊に行く時にせめて、息子のうちひとりぐらいは鈴木家の
しきたりに従って正月に結婚させてやりたいってお父さんが言い出して…。

明子　慎吾さんが形だけはお父さんに親孝行になるからって。
私もあの時はそう思ってお受けしたんです。

慎一　そうですか、ほんならぼくの妹になるってことや。

明子　はい。

慎一　この子は？

ハル　裕次郎さんの子よ。

慎一　おじさんの？ああ、そういうたら似てるな。
おじさんは中国から帰ってきたの？

ハル　亡くなったわ。中国でご病気なさったらしくて。
裕太は秀鈴さんっていう中国人のお母さんと一緒に帰ってきたの。
そのお母さんもせっかく日本まで辿り着いたのに、弱ってしまってて
去年亡くなったの。お母さん、あんたたち3人とも死んだかもしれないと
思うと、悲しくてね。裕太が傍にいてくれると、なんか孫みたいな気に
なっちゃって正式に子供にもらったのよ。

慎一　なんや、ほんなら君の方は弟か？

裕太　はじめまして。お兄さん。

慎一　知らん間にぎょうさん兄弟が増えとるがな。

ハル　戦争が終わったら、なんだか他人ばっかり3人で住んでたのよね。

明子　ほんと、不思議な一家でしたね私ら。（笑）

慎一　ほんなら、親父は最後の方まで生きてたんや。

ハル　お父さんは戦争で死んだんじゃないもの。

慎一　なんや。ほんなら、なんで？

ハル　言う気にもならないわ、あの飲みすけ。

慎一　なんやて？

明子　お父さんは闇市のメチルで亡くなったんです。去年の暮れに。

慎一　メチル？

ハル　カストリっていう闇のお酒よ。メチルアルコールが入ってたらしいの、
あの人らしいでしょ、お酒が飲みたかったのよ。
死ぬ前に「ハル、俺はお前と一緒なって幸せやった」って、
ほんと戦争で生き残ったのにバッカみたいだわ。

慎一　へぇ、ほな大往生やな。お母さんに手取られて幸せやったんや。

ハル　女々しい人だったからね。

慎一　ほんなら、生き残った男は俺と…慎助は？
お母さん、あいつは？

ハル　生きて帰ってきたわよ。軍人も偉いと早く優遇されるのかしら、終戦直後に戻ってきたわ。
慎一　それはよかった。ほんで今はどこに？
ハル　進駐軍でしょ。
慎一　なんでや？取り調べか？
裕太　ううん、仕事。ジャズ歌手のマネージャーやもん。
慎一　ぼくも歌手になりたいから今度仕事に着いていくねん。
慎一　ジャズ歌手？

そこに慎助が帰ってくる。戦前の軍人らしさはどこにもない。

慎助　ただいま、ママー。アッコ、裕太。ヘイ、チョコレートだぜ。
ハル　（裕太に投げてよこす）おっと、ソーリー、おゲストか。
慎助　慎助、そこに座んなさい。
ハル　えー、そこに？俺、仕事まだあんのよ。（すっかり標準語）
慎助　なに、言ってんの。兄さんが帰ってきたのよ。
2人　兄さん？
慎一　（近寄ってきて2人見つめ合う）ああー！
慎助　慎助。
慎助　兄貴。いやー、無事だったんだぁ。お帰り。
慎一　お前、本物の慎助か？
慎助　当たり前じゃない、偽物だったらここに帰ってこないよ。ははは。
裕太　最高だねママー、息子のうち2人も帰ってくるなんてラッキーだよ。
慎助　まさしくラッキーカムカムってやつ。
裕太　笠置シズ子のサイン、もらってくれた？
ハル　ソーリーまだなんだ。忙しくってさ。今度、ね？
慎一　ちぇ。
ハル　変わったでしょ？
慎一　…っていうか、気が狂ったとしか思われへんな。
ハル　そうね、日本に捧げた22年のうさを晴らすために気が狂った方がいいみたいよ、慎助みたいに。
慎一　お母さん。
慎助　へい、裕太。お前歌手になりたいって言ってたろ？今度本当に少年歌手を出してみようかっていうことになってるんだ。
裕太　ほんと？
慎助　ああ、お前の孤児っていう境遇がいいんだな。

とりあえず、英語のついた名前で…そうだ、お母さんは
中国人とアメリカ人のハーフだったってことにしたらもっと
悲劇的でいいかもしれない。

裕太　お母さんは本当にアメリカ人の血がはいってたよ。４分の１だけど。

慎助　ラッキー、オーラッキーマン。グレートだよ裕太。お前の人生はこれで
バラ色だぜ。従弟がスターになるなんて俺もハッピーだぜ。

ハル　ええ加減にしなさい！（慎助を摘み出す）

慎一　お母さん、関西弁うまなったな。

【第十二場】

１９６０年、昭和３５年。

ハル５８歳、慎一３８歳、明子３３歳、裕太２５歳、今日子１２歳、環１０歳。

裕太　うまないよ。ぼくの方がまだマシや。

ハル　あらあら、裕太の関西弁は元からうまいわよ。

今日子　お父さん、年賀状来てるわ。なんか蛇の絵が描いてある。

慎一　蛇の絵？今年はねずみ年やで今日子。なんや、筆でちゃんと書いてあるやないか。最近の子には絵に見えるんやな。

明子　まぁ。

今日子　お父さんとお母さんには字に見えるの？

慎一　そうやで。今の子にはこれが字には見えんのんかいな。

庭先から萱野がやってくる。

萱野　おめでとうございますぅ

明子　あらら、おめでとうございます。

萱野　奥さん、これ黒豆食べてぇ

明子　あら、ありがとうございます。あ、うちのも持って帰って下さいよ。

萱野　いや、今年も甘甘さん？

明子　そうやねん、ついお砂糖入れてしまうねん。

萱野　戦争中の我慢がまだ尾引いてるわ。

ハル　あ、おばあちゃん。おめでとうさんです。

萱野　由美ちゃん、おめでとう。

ハル　いややわ、私は睦子です。由美は姉ですわ。今年も宜しくお願いします。

萱野　ああ、そうなのね。睦子ちゃん、いつもごめんなさいね。

ハル　いいえ、ほな、吉川さんのとこにも持って行かなあかんから、

萱野　また寄せてもらいますわ。

明子　ああ、どうも。

慎一　なんで正月になったら女連中は黒豆持ってあっちこっち行くんやろうなぁ？

明子　そら、お正月につきものやからですよ。

それより、うちもおせちでも食べませんか？

裕太　賛成。俺、腹減った。

ハル　裕太、俺なんて言っちゃダメ。

裕太　ええやんけ、もう。うるさいなぁ。

明子　裕太。

裕太　なんやねんな、あっちゃんまで母親面すんなよ。
　　俺はもうすぐ大学卒業するねんで。子供とちゃうねんから。
明子　そらそうやけど。
慎一　裕太、もうええやろ。
裕太　ちぇ。（出ていく）
２人　裕太！
慎一　お母さんも、明子ももうええから、放っとけ。構いすぎや。
　　遅い反抗期なんやろう、誰が何言うても聞かへんわ。
ハル　ほんと、あの浮き雲みたいな裕次郎さんの子供とは思えないわねぇ。
慎一　あいつ、この間も学生デモに参加したらしいわ。
ハル　やだ、本当？
明子　裕太が？
慎一　しゃーないわ。若いねんから、安保条約のデモや。
　　気持ちは分からんでもないけどなぁ。はけ口が無いねんやろう。
今日子　裕太お兄ちゃん、デモに行ったん見たことあるよ。
明子　ほんま、今日子？
慎一　どこで？
今日子　去年の暮れ、駅前の喫茶店で女の子とチューしててん。
　　ほんでからかったろうと思って入っていったら、ジュースおごってくれて
　　今日子ちゃんも一緒にデモに行くか？って。
明子　もう、どないしたらええの。そんな危ないことしてっ。
慎一　明子、まぁそんなに気ぃ揉みな。賢い子やねんから今に気がつくから。
　　心配せんでええ。
明子　でも…
ハル　慎一の言う通りよ、明子さん。裕太にだって考えがあってのことなんだから
　　今は見守ってあげましょうよ、ね？
明子　はい。
環　たいへん、たいへん。
ハル　環、どこに行ってたの？
環　隣の美紀ちゃんのとこに遊びに行ってたら、
　　あっこの一番年上のお姉ちゃんと裕太お兄ちゃんが大喧嘩はじめた。
大人たち　裕太が？
　　なんかアッポ反対がどうかとか言うてた。
環　安保反対や。
慎一　あはは…女と大喧嘩…やっぱり裕次郎さんの子供ね。
ハル　笑ってる場合じゃありませんよ。
明子

慎一　　そうやでお母さん。相手は女の子や怪我させたらたいへんや。

全員ドヤドヤと玄関へ。しかし戻ってきた裕太に出くわす。
そのまま居間に逆戻り。

ハル　　裕太？
明子　　どうしたの裕太？
裕太　　…別に。
環　　あー、お姉ちゃんに負けたんや。

しばらく沈黙、裕太は突然立ち上がり奥へ駆け込む。

明子　　裕太、待ちなさい。（追いかける）
今日子　　裕太お兄ちゃん！（追って行く）
ハル　　あらあら、まぁお父さんとはえらい違いだわ。

ハルも笑いながら追って行く。

慎一　　ははは。何や女の子にどつかれたんかいな。

【第十三場】

１９７０年、昭和４５年。ハル６８歳、慎一４８歳、明子４３歳。
そして娘たち今日子２２歳、環２０歳、安奈１２歳。

お節料理を持って入ってくる今日子と安奈。

安奈　お皿ここでええ？
今日子　お父さん、先に何かつまむ？
慎一　ん？ああ、そ、そうやな。

今日子がお酒と高野豆腐を持って渡す。

慎一　（むせてせき込む）甘ぁ…
今日子　大丈夫？
環　お姉ちゃん、お母さんの高野豆腐はお菓子と一緒やで。お酒には合わんわ。
慎一　あーびっくりした。目ぇ覚めたわ。
今日子　あはは。何？緊張してるん？
慎一　やかましい、そんなことない。が、外人やいうても慎助の息子やないか、半分は日本人や。第一、日本語ペラペラらしいから。
安奈　お父さん、お皿になんも入ってへんのに食べてる。
環　しーっ、お父さん、今、あがってるんや。
安奈　なんで？
今日子　アメリカに行ってはる慎助おじさんのとこの子が遊びにきてるから。
安奈　さっきのお兄ちゃん？
環　今お母さんが羽織着せてる子や。
安奈　ふうん、あの人、外人なんや。
今日子　うちは代々洋もんには強い家系やって、いつもお父さん言うてるやんか。
環　そうやん、裕太お兄ちゃんもフランス行ってるし、うちは国際的な家系やでって自慢してたやん。
慎一　それはそうやが…

ハルと明子が笑いながら入ってくる。デビッド１８歳も。

ハル　よく似合うわ。
明子　ほんまですね。お母さん。
デビッド　ありがと。

明子　あなた、どう？
慎一　うん、ＯＫ。ＯＫや。どうも外人は同じに見えてしゃーないわ。
デビッド　ドウモありがと。
明子　うちの子もいつもはミニスカート履いて、踊ったりしてるんやもん。
　　着物を着馴れてへんのは外人さん並みやわ。
ハル　そうね、同じようなものね。
今日子　勉強してる分だけデビッドの方が日本人らしいかもしれんわ。
明子　あんたが率先して言わんでもええの。
ハル　さて、揃ったところで、いただきましょうか。慎一。
慎一　はい、ほんなら、みんなおめでとう。
３人　明けましておめでとうございます。
慎一　一年の計は元旦にありと昔から申しますが…
明子　さあさ、おばあちゃんからお年玉やで。
今日子　わぁー、助かったわ。友達にレコード代借りててん。
慎一　なんや、今日子。女の子が年越しで借金してるんか。
今日子　だって、返されへんかってんもん。
慎一　やれやれ、ほんまに今にフーテンになってしまうで。
明子　お父さんとお母さんからもよ。
環　ありがとうお母さん。
今日子　安奈はちょっと貰いすぎやな。
環　ほんまや。
明子　ええやんか。はい、デビッドさんにもあるわよ。
デビッド　オウ、ありがとう。うれしい。
安奈　これ、なんか知ってる？
デビッド　これは、お金。昔はお餅だったんですよね。
慎一　ははは、違う違う？そうか？
明子　さぁ。
デビッド　お年玉は、神社で神様に奉納された鏡餅を参拝者に
　　配ったところから始まりましたよ。
安奈　へぇ、ほんで？
デビッド　鏡餅は元々、鏡を形どったもの。鏡は魂を写すと信じられていたので、
　　魂＝玉となりました。
今日子　すごいなぁ、デビッド。
デビッド　毎年、神様から鏡餅を戴くので御の字が付き、御年玉、お年玉と
　　言われるようになりました。
今日子　ひゃああ、聞いた？お父さん。

慎一　そやけど、うまいな日本語。安心したわ。
環　お父さんは英語で話さんといかんかもしれへんって、心配しててんよ。
デビッド　しててん？オウ。関西弁はでもムツカシ。
慎一　ははは、そら、慎助が東京弁しか教えてないからあかんのや。
デビッド　ハイ、でもパパもテキストには標準語ばかりなので、日本中で通じる方をしなさい、言いました。
慎一　なるほどな。
ハル　さぁ、じゃあいただきましょうか。
娘たち　はーい。
明子　お父さん、何します？高野豆腐？
慎一　い、いや。さっきひとつ食うたから、他のんでええわ。
明子　いやぁん。もうつまみ食い？好きやねぇ。
環　戦争から帰って来た時、感激した味やもんね。
慎一　環、何ちゅうこと言うんや。
明子　ほんま、おませなことばっかり言うねんから。ふふふ。
安奈　デビッド、これはなんか分かる？
デビッド　お箸。両端が細くなってるのは細い身代を太くしていく例え、また細くなってしまわないように太い所を握るようにするんですよ。
慎一　ええな。おもろい子やわこの子。
デビッド　やわここのこ？
ハル　本当に勉強してるわねぇ。
安奈　デビッドのパパはお父さんの弟なん？
慎一　そうや、お父さんは3人、男ばっかりの兄弟の長男や。お前らと正反対や。
安奈　へぇ、もうひとりのおじさんは？
ハル　戦争で死んだのよ。
今日子　お母さんの旦那さんやった人？
環　なにそれ？
今日子　知らんの？お母さんとお父さんは、ほんまは最初夫婦と違うかってんて。
デビッド　（お節を食べて不思議そう）オウ！ベリィ　スィーティね。
明子　死んだおじさんのお嫁さんになるはずやってんけどね。
昔はようあるんよ、こんな話。戦争の頃は仮の結婚したんや。
デビッド　これもスィーティね。
環　ほんなら、余ってた者同士で結婚したん？
ハル　ほほほ、いいじゃないの。もう昔の話なんだから。

電話の呼び鈴の音が聞こえる。

今日子　お父さん電話や。
慎一　なんやろう、正月早々に。
明子　私がでますわ。（玄関のところへ）
今日子　デビッドいつまで日本におるの？
デビッド　1月15日に帰ります。
今日子　ええな、アメリカか。私も行きたいわ。イギリスでもええけど。
ビートルズのコンサート行きたいもん。
環　ええわ、ジュリーで満足してるから。
安奈　安奈もジュリー。ジュリーとピーがええ。
慎一　なんやそれは？あの毛の長いグループサンドのことか？
今日子　いややわ。お父さん。デビッドがおるのに、ちゃんと言うてえな。
グループサウンズ。
慎一　知るかそんなこと。わしにはグランドホテルもグループサンドも一緒なんや。
今日子　やめてよもう。
ハル　おばあちゃんはサリーが好きよ。
安奈　えー、おばあちゃん、サリーか。

明子が血相変えて飛び込んでくる。

明子　あなた、大変。
慎一　どうしたんや、母さん？
明子　慎吾さんが生きてはったみたい。
慎一　慎吾？おいおい、大丈夫かこっち見てみ。
明子　今、大使館から電話で、ルバング島という所で旧日本兵が発見されたって。
その人が鈴木慎吾少尉と名乗ってはるねんて。
慎一　ルバング島？
ハル　慎吾、ほんとに慎吾なの？
明子　さあ、でも該当する人の候補になってるらしいんです。年が40歳で、
なんや、最近はやりの貧乏旅行してる若い男の子に見付けられて、
「上官の戦争終決のお声を聞くまでは自分は命令を守ってジャングルにいる
義務がある。」って言うてはるそうです。
ハル　間違いないわ。慎吾よ。あの子なら言いそうな理屈よ。
慎一　ちょっと待ってくれよ。戦争が終わって25年やで。あいつ、なんぼほど
理屈こねとったんや。
環　何の話？
今日子　お母さんの旦那さんが生きとってんて。

安奈　え？
環　びっくりしたなもう。
今日子　あほ、古いギャグ言うてる場合とちゃうで。
環　ちゃうちゃう、ほんまに言うてんて。
デビッド　チャウチャウ。チャウチャウは犬ですよ。
慎一　ほんまや、えらいのんに当たったで。
デビッド　オウ？
明子　ともかく大使館に行く用意せんと。今日子、表で車拾うてきて。
環、安奈、ここ片付けて。おばあちゃん、行きますよ。

テキパキと返事して動く女たち。慎一はぽかんと見ている。

明子　お父さん！
慎一　は、はい。
明子　慎助さんとこに電話して！
慎一　はい～。

一同はとりあえず手分けして連絡をする算段をはじめる。
みんなが出ていって取り残されたデビッド。
そこに、萱野が庭先から入ってくる。

萱野　おめでとうさんです。
デビッド　オゥ？
萱野　あら、びっくりしたわ。外人さんいはるわ。
デビッド　あ、こんにちは。
萱野　ウエルカム　トゥ　ジャパン！
デビッド　オウ、サンキュー！
萱野　えっと、困ったでぇこれ。
イッツ　ジャパニーズ　ビーンズ！黒豆やから、
えー、ブラックビーンズ。ベリィスイーティーあはん？
デビッド　オゥ、イッツ　ア　スィーティー　ツゥ
日本のお正月は甘いものばかり食べるのですね。勉強になりました。
萱野　ユー　トライ？
デビッド　ＯＫ。（食べる）
ウーン、ダッツグッド！ベリィナイス！
萱野　良かったぁ、これ外人さんにも分かる味なんやわ。

いやぁ、自信持とう！サンキュー、サンキュー！
あ、ほんらな、国に持って帰ってぇ、
あの、ディス ビーンズ プレゼント。
デビッド　ああ、サンキュー。
萱野　ほな、ちょっとうちに来て貰えます？あの、カミング マイハウス。
デビッド　ＯＫ。
萱野　いやもう、どないしょう。写真撮ってね、写真。

連れていかれるデビッド。

【第十四場】

１９７１年、昭和４６年。慎一４９歳、慎吾４１歳、寝酒をもって慎一と慎吾が登場。

慎吾　兄さん、ほな明日立つわ。
慎一　女連中が温泉から戻ってくるまで居ったらええのに。
慎吾　いやぁ、もう暮れに十分お別れ言うたしな。
慎一　日本はそない窮屈かいな。
慎吾　うん、そうやな。お袋が一緒に付いて来たらええのに、と思うてたが仕方ないな。
慎一　母さんはここがええんやろ。あの歳で今更どっか行きたないんや
慎吾　そうやな。まぁ分かってる。
慎一　フィリピンに帰って、どうするねん？
慎吾　さあな、子供の施設でも開こうかと思ってな。
慎一　今度のことで国から金ももうたし、あっちは孤児が多いんや。
慎吾　そら、立派なこっちゃ。慎助といい、お前といい。
慎一　わしら３人は離れ離れになる運命の兄弟なんかな。
慎吾　さあ、それはどうやろう。時代やな。
慎一　向こうに行ったら、嫁を貰えよ。
慎吾　うん、そうするわ。
慎一　お前の嫁さんはわしがもうてしもたしな。
慎吾　ははは、そうやったな。明子さんによろしゅう。
慎一　うん、言うとく。
慎吾　兄さん、日本人は軽くなったな。
慎一　そうやな。わしもなんか分からんわ。毎年すごいスピードで変わっていくやろ。そら正直言うて娘の気持ちなんか分からんで。
慎吾　兄さんも一緒に行こうや。南はええで。
慎一　日本はものが多すぎて、どうしたらええんか分からんわ。南か。南方はもうええわ。戦争の時だけで。お前には悪いけどな、こんなこと言うたら。
慎吾　いいや、そうやな。みんなそうなんやな。こんな急成長してる国について行った方がそれでもええんやな。
慎一　そう見えんねんな、お前には。そやけどいっそ羨ましいわ。一気に変わった日本を見て、捨ててしまえるのはお前にだけ与えられた特権や。みんな日々、２４時間生きとらなあかんかったからな。
慎吾　そうかもしれん。

慎一　また、手紙でもくれ。
慎吾　兄さんこそ、飛行機で6時間や。遊びにきてや。
慎一　飛行機か。…考えとくわ。わし、あれ恐いねん。
慎吾　なにを言うてんねんな、戦争行った人間が。
慎一　あの時は船やったからな。
慎吾　ははは、分かった、分かった。文明国日本が聞いてあきれるで。
慎一　気つけてな。
慎吾　ありがとう、兄さん。
慎一　おう。（熱燗がカラになる）もう一本つけよか？
慎吾　うん、そやな。
慎一　お前、カップラーメンって知ってるか？作ったるわ。
慎吾　なんや、それ？
慎一　ふふふ。知らんやろう？

2人して退場。

【第十五場】

１９９５年、平成７年。大家族になっている鈴木家。
ハル９３歳、慎一７３歳、明子６８歳、今日子４５歳はなんと裕太５６歳と結婚している。
子供は２人で男の子ばかり長男良太２０歳、次男良平１８歳。
環４３歳の旦那、一茂４０歳、子供は充１５歳。なぜか元旦那の和幸も来ている。
というのも充は和幸の息子。
安奈３５歳はシングルマザーになっていて娘がいる。美喜８歳。
娘たちはハルと慎一が帰ってこない間に相談をしている。
賑やかな笑い声、お節料理を運んで一同が入ってくる。

美喜　ママ、なぁおかまって何？
安奈　あほ、急に聞いたらあかんって、あははは。
今日子　ちょっと、どうしたらええの、もう！
安奈　（お重の蓋を開けて）ハーイ、美喜。
美紀　やった！
環　ちょっと、なに安奈。この高野豆腐？
安奈　え、タイ風やねんけど？
今日子　なにそれ？
安奈　辛いもん好きやねんもん。
環　あんた、娘にこんな唐辛子の塊食べさせてるの？
安奈　だって、この子好きやねんもん。なぁ美喜、タイ料理好きやな？
美喜　うん、去年、プーケット行った時めちゃ食べたね、ママ。
今日子　なにそれ？プー？
安奈　それはええから、ほんで、お姉ちゃんとこの良太くんの話やろ？
今日子　そやったわ、もうどう思う？
一茂　良太くんって？
環　上の子やんな？
一茂　あの子が？へぇ。
環　どうすんの、お父さんやおばあちゃんになんて言う？
安奈　そのまま言うたらええやんか。
環　安奈は仕事バリバリにしてるから、そんなこと言うねんで。
家の中に入ってしもた年寄がそんなもん受け付けるかいな。
安奈　だって、しょうがないやんか。良太くんはどこなん？
今日子　奥に隠れさせてある。
安奈　可哀相に。連れてきたげーな。

今日子　だって、お父さんがいつ帰ってくるか分からんもん。
環　それで裕太お兄ちゃんはええの？
裕太　しょーがないよ。本人が望んでる人生やったら。
今日子　これやねん、この人学生運動なんかしてたから「自由」とか「愛」って言葉大好きやねんもん。
環　何言うてるのんな、自分かってその言葉に浮かされて「裕太お兄ちゃんと結婚する～。」言うて家出したんやんかっ。
安奈　そうやわ、子供がホモになるっていうのも因果やで
今日子　ちょっと大きい声で言わんといてぇな。いややわぁ、もう。あなた、様子見てきて。
裕太　大丈夫やろ、良平とテレビゲームしてたから。
環　この家になんでそんなもんがあんのよ。
安奈　私と美喜のん。
今日子　あきれた、安奈。あんた３５やで、子供とゲームして正月過ごしてる場合とちゃうやろ。ただでさえ、美喜ちゃんの父親もおれへんねんから、一回くらいこの子のために結婚したら？
安奈　ほっといて、結婚せなあかん理由はどこにもないやろ？おばあちゃんと、美喜と３人で機嫌よう住んでるねんから。
環　ひとり、余ってるで。やろか？
安奈　和幸さん？冗談やないわ、誰がお姉ちゃんの前の旦那と！お余りやんか。
環　しーっ、大きい声でいいな、奥におるねんから。
今日子　え、和幸さんが？なんで？
環　だって充の父親やねんもん。なぁパパ？
一茂　そうやな、環。
美喜　なぁパパ？
安奈　あほ、真似したらあかんの。
美喜　ふふふ。
今日子　もう、あんたら２人とも。もうちょっと人生設計ちゃんとしたら？
安奈　若い時に駆け落ちして、出来た子供がゲイになったら言うことが違うわ。人生設計やて。
美喜　人生設計ってなに？
安奈　失敗するっていう意味のこと。
今日子　バカにしてる？
安奈　尊敬してるわぁ。
環　なあ、それほんまなん？ちょっとフランスに留学したからそれらしいこと言うてんのと違うの？

今日子　それらしいことで切ってまう？
環　切ってまうって…ええ、もうないの？
安奈　あはは。お父さんにうちの子がフランスから帰ってきたら女の子に変わってましたって、はっきり言うしかないやん。思いきったことすんねんなぁ、今の子は。
環　甥から姪に変身。
安奈　変身！
美喜　ちゃかさんと聞いてよ。
今日子

そこに慎一、ハル、明子が帰ってくる声がする。

環　おばあちゃんや。
安奈　お父さんとお母さんも一緒やで。
今日子　なんて言う？あなた、なんて言うたらええのよ。
裕太　おい、急にふるなよ。
今日子　どないしょう。
安奈　お姉ちゃん、長女やろ。なんか言いや。
今日子　ええ？

襖が開いて3人が入ってくる。
一同はとっさに今日子の顔を見る。今日子は注目を浴びて。

今日子　おばあちゃん、お父さん、お母さん。明けまして
一同　おめでとうございます。
慎一　なんや、えらい威勢がええな。
明子　ほんまやね。
ハル　いいことよ、家が繁栄してる証拠じゃないの。
慎一　揃ってるんか？
今日子　はい。
慎一　子供らは？
今日子　あの、奥に…
慎一　呼んどいで。今日はおばあちゃんから、みんなに発表することがあるねんて。
安奈　あ、でも子供らはあんまり関係ないんでしょ？
慎一　今日は別や。
今日子　はい。あなた、呼んできて。
裕太　俺か？おいおい勘弁してくれよ。

今日子　ええから、大人しくさしてたら分からへんねんから。
裕太　まいったな。

子供たちが呼ばれる…確かにひとり少々、女っぽい。
充の父親、和幸も入ってくる。

今日子　お父さん、揃いました。
慎一　うん、お母さん。揃ったよ。
ハル　みんな、お正月にここへ来てくれてほんとにありがとう。
いつもいつも人の集まる家で嬉しいわ。…でもね、わたしは
この家を今年、手放そうと思ってるの。
今日子　手放すって、おばあちゃん。
ハル　安奈には相談したんだけど、なんせ共同生活者ですからね。
環　これから。どうすんの？
ハル　慎一の所に行くわ。
今日子　あんなに嫌がってたのに。
ハル　私も一生をここでと思っていたけれど、去年の震災で考えが変わってね。
１９歳の時に関東大震災を逃れて関西にお嫁に来たけど、
まさか７２年も経ってもう一度あんな恐い目に合うとは思いもしなかった。
ここにしがみついてちゃダメっていうことなのかもしれないわ。
そう思って、出ていくことにしたの。
慎一　みんなの思い出を吸い込んだ家やけど、全員で見るのは見納めやな。
明子　長いこと、ごくろうさんやったね。
今日子　あかん、とても言い出せる雰囲気ちゃうわ。
安奈　もう、ええやんか。今年は黙っとき。
今日子　そうするわ。
慎一　なんや？なんかあるんか。
今日子　ううん、お父さん。なんでもない。私は賛成やわ。おばあちゃんも
留守がちな安奈と、小さい美喜ちゃんと住んでたら心配やし。
環　私も。
ハル　そう、じゃあ今日はこの家をみんなで見て、
最後のおせち料理を食べて、お別れしましょうか。
３人　はい、おばあちゃん。

一同奥へ行く。口々に家の話をしている。
子供たちは家に愛着がないのか残ってる、良太もそこに。

良平　この家がそんなに好きなんかなぁ。
充　なぁなぁ、続きしようや。
良太　それよりビデオ見ぃへん？
良平　何か食べるんやろう？
充　ああ、あの綺麗な箱に入ってるやつやろ？
　えっと、ハルおばあちゃんの高野豆腐はめっちゃ甘辛いし、
　あっこおばあちゃんのは甘いねん。
良平　ほんで、安奈おばちゃんのタイ風らしいで、辛酸っぱいねんて。
充　どれもいらんって感じやな。
良平　普通、高野豆腐ってあっさりしてて旨ないか？
良太　もうええやん、そんな話。なぁ…充君って肌きれいね。
充　え、俺？そうかなぁ
良太　きれいって、ちょっと触ってもええ？
充　あ、うん。
良平　お兄ちゃん、あかんで。
良太　じゃま。いやぁ、ほんまにきれいわぁ。

怪しいムード、そこに大人達が次々と通り掛かる。
安奈と美喜が最後にハルの手を引いてくる。

ハル　あらまぁ、仲良しなのね。さぁいらっしゃい、家を見ますよ。
安奈　何やってるの、あんたら、正月くらい大人に付き合い！
3人　はーい。

やれやれという表情の安奈、良太は平気な顔つきで奥へ。

安奈　おばあちゃん、ここも見る？
ハル　そうね。
美喜　ママ、雪降ってきた！（喜んで外に出ていく）

縁側から雪を眺めるハルと安奈。ハルが柱をさすって。

ハル　長い事…おおきにでした。

【第十六場】

２０１２年、デビッドの息子ケント３２歳が襖を開けて風通ししている。

ケント　ふぁぁぁ…いいお正月だなぁ。
　　やっぱり、こういう日本家屋が一番落ち着くなぁ。

女がひとり入ってくる。

育子　あの…
ケント　わぁ、びっくりした。
育子　すみません。
ケント　はい？
育子　ここは、鈴木さんっていう大家さんの…
ケント　はい、そうです。
育子　ああ、よかった。私、１０日からここをお借りすることになってます、
　　大槌町の吉田の家の者です。
ケント　ああ、そうですか。どうも、初めまして。
　　僕、この家の管理を任されてる鈴木ケントです。オーナーの甥に当たります。
育子　ああ、そうですか。お正月から押しかけてすんません。
ケント　いや、構いませんよ。ゆっくり家を見て行ってください。
　　去年の震災までは空き家だったんですがね、叔母が阪神大震災も
　　乗り切った家だから耐震工事したら使えるからって言い出して。
育子　はい、うちの父からも聞いてます。
ケント　そうですか。古い家ですが、改装も終わってますので安心して
　　住んでくださいね。
育子　ありがとうございます。
ケント　お仕事の関係でこっちに来られるんですか？
育子　いいえ…向こうには何も残ってないので、父が心機一転別の土地に
　　住んでみることにしたんです。おじいちゃんが関西だったらしくて。
ケント　ああ、そうですか。大変でしたね。
育子　いいえ、皆、同じですから。あ、そうだ！
　　あのこれ…お正月なんでちょっとおせちの真似事をして作ったんで、
　　よかったら食べて下さい。
ケント　え？いいんですか？嬉しいなぁ。
育子　元旦なので管理人さんがいらっしゃったらと思って。
ケント　ありがとうございます。

庭から萱野が入ってくる。

萱野　おめでとうさんです。
ケント　わぁ、びっくりした。ああ、お隣の。どうも、おめでとうございます。
萱野　越してきはったん？
ケント　はぁ、まぁ…
萱野　いやぁ、嬉しいわぁ。長い事ここ空き家やったんでねぇ。
　　あ、隣のマンションの管理してる萱野です。
　　奥さん、お近づきの印に、これ。黒豆なんか食べはる？
育子　は？
萱野　黒豆やん、世界中の人が食べはるのに、知らんの？
育子　いえ、あの知ってます。
萱野　いるやろ、食べてよ、おばちゃん炊きすぎて困ってるねん。
育子　はぁ。
萱野　いやー、食べてくれる。助かるわぁ。
　　ああ、タッパ返してもらわんでもええからね。
　　配る用に百均で買うてきたから。
育子　あの…
萱野　ほな、ありがとうね。失礼します。（出ていく）
育子　関西の人はみんな、あんな感じですか？
ケント　ははは。まぁ、おばちゃんは皆あんなもんですわ。
育子　安心しました。
ケント　そら、良かった。
育子　（黒豆を見ながら）あのこれ。
ケント　え、ああ。せっかくやし、一緒に食べませんか？
　　いただいたおせちもあるし。
育子　ああ、はい！是非。
ケント　ほな、ビール持ってきますね。
育子　じゃあ、開けておきます。

嬉しそうに台所に走って行くケント。用意をする育子。
ケントがビールを持って戻ってくる。

ケント　お待たせしました。
育子　はい。
ケント　（お節を見て）わぁ綺麗やなぁ。田舎の人はこういうの上手ですね。

育子　いいえ、見よう見真似なので味が心配です。
ケント　ぼく、こう見えて日系三世なんですよ。
　だからこういう日本ぽいものが逆に大好きなんです。
育子　あらぁ、そうなんですか。じゃ、どうぞ。

育子が取ってくれた物を食べるケント。

ケント　う。
育子　どうですか？
ケント　う…ん。
育子　お口に合いませんか？
ケント　う…う、唸るほど美味しいです！
育子　わぁ、良かったぁ！じゃあもっと召し上がって下さいね。
　嬉しいです。初めて作ったんで。やったー！
ケント　やられた…。（ビールを一気飲みする）

新しい色々な予感を秘めて、また次の時代が始まっていく。

終劇。

登場人物

●万太郎
●千次郎
●育子
●雪子
●月子
●花子
●ジョージ・ケリガン（花子の夫）
●慎太郎
●裕次郎
●ハル
●慎一
●慎助
●慎吾
●ジャン・ルイ・バロウ（裕次郎の友達）
●レイ
●明子
●裕太
●今日子
●環
●安奈
●デビッド鈴木（慎助の息子）
●美喜（安奈の娘）
●良太（今日子の長男）
●良平（今日子の次男）
●充（環の息子）
●一茂（環の二番目の夫）
●和幸（環の最初の夫、充の父）
●萱野家の女性たち
●鈴木ケント（デビッドの息子）
●吉田育子（大槌町から来た女性）